

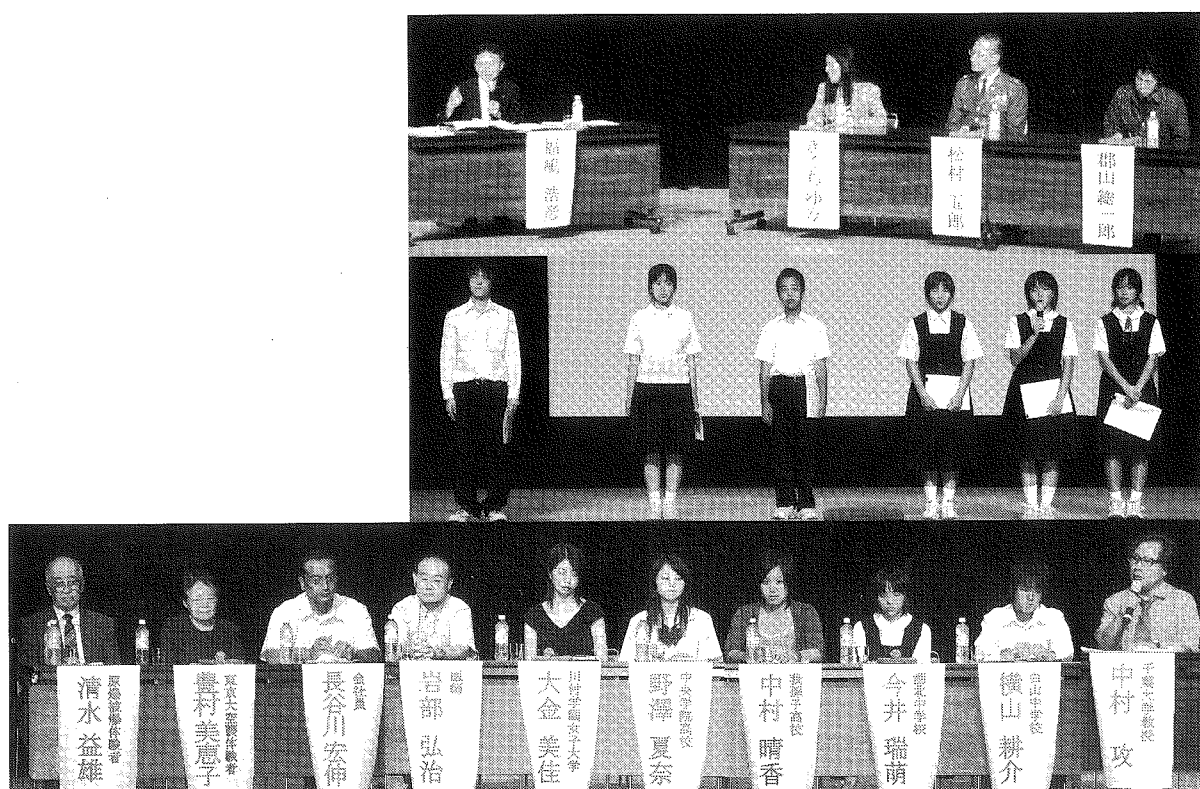
# 第4部

## 「平和を語ろう」の記録

第1部中学生による発表 第2部リレートーク

## 「戦争と平和」講演録

イラク市民の暮らしと平和を考える  
講演者への質問要旨と講演者のコメント



## 戦後60周年記念平和事業

### 「平和を語ろう」

第1部 広島市平和記念式典へ派遣した中学生の発表

第2部 中学生・高校生・戦争体験者などによるリレートーク

平成17年9月19日（月）午後1時から

於：我孫子市民会館大ホール

○司会 皆様、我孫子市主催リレートーク「平和を語ろう」によろこそお出でくださいました。私は平和事業運営委員の平田と申します。よろしくお願いいたします。(拍手)

7月から開催しております平和事業ですが、映画会「父と暮らせば」では、805名のご参加をいただきました。また、戦争資料展では2,000名を超えるたくさんの方々がこの市民会館に足を運んでくださいました。この場をお借りして御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

本日の内容をご紹介します。この平和事業の目的の一つであります次の世代の子どもたちとともに、戦争、平和を一緒に学び伝えていこうとの目的がございます。暑い8月に市内中学校から6名の生徒さんが代表となって原爆の地広島へ訪問してもらいました。第1部では、その中学生による力強い発表がございます。ご期待ください。

1時45分で一たん終了しまして15分の休憩をいただきます。第2部は2時から4時まで、中学生を含め各世代の方々、また戦争を体験された方々を交えてのリレートーク「戦争ってなに？平和ってなに？」を準備してございます。

最後までどうぞよろしくおつきあいのほどお願い申し上げます。

それでは、開会に先立ちまして、我孫子市長福嶋浩彦よりあいさつがございます。

○福嶋我孫子市長 どうも皆様こんにちは。きょうはよろこそ「平和を語ろう」にお出でくださいました。もう戦後60年がたちましたけれども、そろそろおじいさんおばあさんが戦争を知らない世代になりつつあります。過去の戦争の記録をきちっと次の世代に伝えるには、もう今が最後のチャンスではないかと思えます。そういった思いもあって、今年は市内の中学生6人を広島の平和記念式典に派遣をしました。これは、来年以降も続けていきたいと思っておりますけれども。中学生、広島に行っているいろいろなことを見て、感じて、考えてきてくれたと思えます。その報告をこれからしてもらおうわけです。

また、過去の戦争だけの話ではなくて、今も地球上には大変多くの核兵器がありますし、いろいろなところで紛争も起こっています。アメリカの同時多発テロからイラク戦争、そしてまたロンドンのテロなどの過程は本当に憎しみと報復の連鎖がまた新しい暴力と犠牲者を生み出しているように思えます。

そんな中で、私たちはこの地域から世界の平和のために、日本の平和のためにどんなことができるのか考えていくことも絶対に必要だろうと思えます。第2部のリレートークでは、そんなことも含めて広島に行った中学生の代表の中から2名、そして高校生、大学生、戦争を知らない若い世代の方、そしてまた戦争を体験された方、そうした皆さんでのリレートークをお願いをしています。コーディネーターは千葉大学の中村先生をお願いすることにしております。

連休中ということもあって参加いただいた方ちょっと少ないんですけども、内容の濃い充実した「平和を語ろう」になることを期待しております。

それから、ちょっとコマーシャルをさせていただければ、この後の大きな取り組みとしては、10月15日にイラクの問題をテーマにした講演会を開きます。これは今の日本の自衛隊もイラクに行っているわけですが、イデオロギーや先入観はちょっと横に置いておいて、一体イラクでどんなことが起こっているのか。特に私たちと同じ市民がどんな状況に置かれているのか、まず私たちの自分の目でよく見て聞いて考えようではないかという企画です。そういうこともあって、一番イラクの状況をよく知っている方3人来ていただくことにしました。1人はイラクで人質になったフォトジャーナリストの方です。それから、もう1人は自衛隊の先遣隊の隊長さんです。それから、もう1人は、国際的な平和団体の代表の方です。テレビなどで映される映像は爆弾を落とす米軍機の側からの映像が圧倒的に多かったわけですが、その爆弾が落ちたイクラの市内で住んでいる人たちがその爆弾によってどんな状況になったかはほとんど映像としては私たちに知らされていません。そういった情報を集めて世界に情報を発信しているグループの代表の方です。3人とも全く違う立場の方なんですけれども、違う立場の人、自分と意見が違う立場の人の言うこともまずよく聞いてみるということがまたこれ平和につながる一番大切な姿勢ではないかなと思っております。

それから、10月22日には平和コンサートと、それから戦争中の食を再現しようという取り組みを、これは湖北公民館で開催をします。また、子どもたちの平和への思いや戦争体験者の記録をつづった平和祈念の文集も今編集の作業を進めていますけれども、子どもたちの原稿ちょっと集まりが悪いということを知りましたので、またそちらのほうにもどうぞ協力をよろしく願いをいたします。

それでは、きょうは平和を語ろうのリレートーク、どうぞ最後までよろしく願いいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

それでは、第1部の開幕です。中学生の皆様が自己紹介をしてくださいます。お願いします。

○木村 我孫子中学校2年の木村友美です。(拍手)

○今井 湖北中学校3年の今井瑞萌です。(拍手)

○杉本 布佐中学校2年の杉本美幸です。(拍手)

○綿引 湖北台中学校3年の綿引康一です。(拍手)

○田中 久寺家中学校2年の田中麻理沙です。(拍手)

○横山 白山中学校3年の横山耕介です。(拍手)

○横山 皆さん、こんにちは。僕たち6人は8月の5、6、7の3日間、我孫子市を代表し、広島で開かれた平和記念式典に参加してきました。広島ではたくさんの経験をしてきました。その経験を今発表しようと思うのですが、お聞きになっている方々にわかりやすいように

映像で発表していきたいと思います。

それでは、よろしくお願いします。(拍手)

○木村 私たちは各中学校から1名、広島で行われる平和式典に参加することになりました。我孫子代表として広島に原爆が投下された60年前の出来事や、その後続けられている平和式典の様子を体験していきたいと思います。

8月1日、私たち6人と引率者の和田さん、寶玉さんとで市長さんに出発のあいさつに行きました。

市長さんに自分たち1人ずつの広島行きの目標を話しました。市長さんからは、広島に世界で初めて原爆が落とされたこと、広島の平和記念集会で平和の大切さを体験してきてくださいと激励を受けました。

8月5日、出発の日です。我孫子駅集合でした。

男子も集合したので出発することにしました。写真には写っていませんが、出発には市役所から企画調整室の室長さんや実行委員長の水津さんなどがお見送りに来てくださいました。この後、東京駅まで行き、そこから新幹線のぞみ47号に乗りました。のぞみ47号の車内はゆったりとしていて乗り心地は最高です。車内では読書をしたり、広島に着いてからの話をしたりしてとても楽しかったです。

○杉本 東京から約4時間で広島駅に到着しました。まずは改札口の近くで広島に着いた記念の写真を1枚撮りました。広島駅から旅館まで路面電車で行きました。

案内してくださる和田さんと田村さんです。田村さんは以前我孫子に住んでいて、現在は広島に住んでいる方です。田村さんはこの後2日間、私たちの案内と写真撮影をしてくださいました。

旅館に荷物を置いてからすぐに広島平和記念資料館に行きました。そこには、私たちの案内のために被爆体験証言グループの幸元さんが待っていてくださいました。幸元さんは小学校2年生のときに勉強していた近くのお寺で原爆の被害に遭われたそうです。幸元さんは8月6日8時15分ごろ、お寺で勉強するために机を並べていたとき、大きな音とともにお寺が壊れ、下敷きになりました。建物から這い出したときには回りは火の海だったそうです。

原爆投下によって爆心地は一瞬にして焼け野原になりました。その焼け野原になった様子がアメリカ軍によって飛行機から撮影されていました。これがその写真です。真ん中の赤い玉は地上600メートルで炸裂した原爆の様子をあらわしています。原爆投下の後の焼け野原になった町の様子が再現されています。1945年8月6日、午前8時15分、世界で初めて広島に原爆が投下されました。その恐ろしい時間を刻むように懐中時計の針はそこで止まっていました。

○今井 被爆した人々の様子を蠟(ろう)人形で再現したものです。服はボロボロに焼け、

腕と顔はやけどをし、さらにその皮膚と肉はドロドロになってたれ下がっています。

資料館には被爆した人や建物の破壊された様子など、たくさんの資料が展示されており、参観者も数多く来ていました。

広島に投下された原子爆弾の模型です。長さ約3メートル、直径約0.7メートル、重さ約4トン、長崎に落とされたものはこれよりも大型のものとされています。

資料館から外に出て幸元さんから原爆投下のときの様子や広島復興の様子を話していただきました。「現在も世界の中では戦争が行われているが、原爆を使うようなことは絶対にあってはいけません。また、皆さんには平和を願い、戦争の悲惨さを次の世代の人にも伝えていってほしい」というお話を聞くことができました。

幸元さんのお話を聞き終わって、みんなで持って行った千羽鶴を飾るため、原爆の子の像のところに行きました。まずは、世界に平和を込めて。裏には、我孫子市の代表である私たちの名前もしっかり入れて、鶴を捧げる前に全員で記念写真を撮りました。原爆の子の像も全身を入れてみんな仲良く。この千羽鶴は後ろにあるガラスケースに納めてきました。

○田中 8月6日の朝は5時半に起床し、早めに朝食を取り、平和記念式典の会場へ向かいました。8時開式の予定でしたが、7時ごろには座席の半分が埋まっていた。配られた資料の中に折り紙が1枚入っていました。早速みんな鶴を折り、式典の後、回収箱に入れました。

式典会場のメインステージの後方には吹奏楽団や合唱団の舞台が設定されていました。7時半ごろになると会場もいっぱいになりました。

午前8時、いよいよ平和記念式典が始まりました。私たちも緊張しながら式典を見守りました。8時15分、全員黙とうの後、全世界に向けて秋葉広島市長が平和宣言を述べました。「被爆60周年のきょう、過ちは繰り返さないと誓った私たちの責任を謙虚に確かめ、すべての原爆犠牲者に哀悼のまことを捧げます。安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから。」

平和宣言が終わると同時に、鳩が一斉に放たれました。この後、子ども代表による平和への誓いが朗読されました。そこには今年亡くなった前ローマ法王ヨハネスパウロⅡ世が広島から世界に発信したメッセージが引用されていました。「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです。広島を考えることは核戦争を拒否することです。広島を考えることは平和に対しての責任を取ることです。」さらに小学生は、「私たちは被爆者の方々の願いを受け継いでいきます。私たちは核兵器の恐ろしさを世界中の人々に訴え続けます。私たちは広島を語り継ぎ、伝えていきます。平和な世界を築くまで。」と宣言しました。

○綿引 続いて、内閣総理大臣があいさつされました。平和憲法を守り、非核三原則を堅

持し、核兵器の廃絶に全力で取り組むと述べていました。その後、来賓や一般の人々の献花が行われました。この式典には55,000人が参加しました。

式典の後、被爆体験証言グループの山崎さんに会い、案内をお願いすることになりました。ところが、山崎さんの住んでいた町の中心地の記念碑の前でドイツのグループの方々が原爆で亡くなった人のためにバイオリン演奏をしてくださることになり、みんなで聞くことにしました。6人の少女の演奏でしたが、バイオリンの音色は何となくもの悲しく聞こえました。この人たちも広島悲しい出来事を繰り返さないように祈りを込めて演奏したのだと実感しました。

演奏を聞き終わった後、被爆体験者の山崎さんにお話を聞きました。山崎さんは17歳のときに原爆に遭ったそうです。山崎さんはこれから話すことはすべて私がこの目で見たことだと3回も繰り返されてから話を続けられました。ここに座っているところから100メートル後方が山崎さんの家だったそうです。

山崎さんは、原爆が落とされたとき、ここから1.5キロメートル離れた県立広島第二中学校にいたために校舎の下敷きになり、全身70ヶ所も傷を負ったが、かろうじて助かったとのこと。やっとのことで家にたどり着いたが、自分の家のあったところには家も人も草もなかったそうです。原爆が落とされて平和公園のところには死んだ人たちが山のように重ねられていたそうです。それは、とても悲惨な光景だったそうです。

さらに、次の日、8日にはその死体にウジがわいて、あたり一面が真っ白になっていて、この世の出来事とは思えなかったそうです。

山崎さんの町はすっかり焼けて町の人もいなくなりました。せめて町の人々の写真を1人でも多く集めて供養しようと捜し当てた写真がこれですと大切な写真を見せてくださいました。この写真はその後、資料館に納めるそうです。

山崎さんと第二中慰霊碑の前で記念写真を撮りお別れをしました。山崎さんが案内しながら何回もお話されていることは、原爆は人も家も草木や山のすべてを、ふるさとのすべて、ふるさとまでもなくしてしまうんですよ。人間は原爆を使ってはいけません。私がこれまで生きてこられたのは私を支えてくれた友達がいたからです。皆さんも友達を大切に生きてくださいということでした。

県立広島第二中学校（旧制）の1年生322人と4人の先生が建物疎開の作業に動員されていて被爆し、全滅したところに記念碑がありました。この話は広島へ行く前に読んでいました。碑の裏には全員の名前が刻まれていました。僕たちより年下で命を失った中学生のことを思って胸が詰まりました。

山崎さんの案内と説明も終わり、平和記念公園に改めて花を捧げに行きました。花を捧げた後、お金を添えて、亡くなられた方のご冥福をお祈りしました。一人ひとりの願いを込め、お祈りをしました。

○横山 この後、世界遺産になった原爆ドームをバックにし、記念撮影をしました。今にも崩れ落ちそうなドームですが、人類史上最初の原子爆弾による被爆の悲惨さを伝える歴史の証人として、また核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボルとして世界遺産に登録されたのです。私たちはドームのすぐ近くを通りながら、人間がこの地球に二度と原爆を落とさないようにと祈りました。

話は変わって、もうお腹がペコペコでした。朝の6時から何も食べておらず、広島案内の田村さんが前もって予約してくださった広島で一番おいしいお好み焼き屋さん案内していただきました。目の前でジュージュー焼いているときのおいさがたまりませんでした。見ている方々には申しわけありませんが、これが広島風お好み焼きです。とてもおいしかったです。

6日、午後7時、平和記念公園と原爆ドームの間にある元安川へ灯籠流しに行きました。既に川には数百という灯籠が流れておりました。引率してくださった和田さんは原爆で亡くなったお父様へ、「お父さん、我孫子から中学生を連れてきましたよ」と灯籠に書かれておりました。私たちも1人ずつ祈りを込め、平和の願いを書きました。自分たちの名前もしっかり入れ、何でも願いをかなえてしまうという意味を込めてドラえもんの絵まで入れてしまいました。これが私たちが灯籠に書いたものです。こちら側には一人ひとりの名前とドラえもんの絵が書いてあります。本当の願いはこのとおりです。

これは灯籠を流す前に撮った写真です。これから灯籠を流します。ようやく順番が来て、僕は厳かな気持ちで灯籠を川に入れました。灯籠はみんなの願いを背負い流れていきました。

次の日、広島名物路面電車に乗り、駅に向かい我孫子に帰って行きました。たくさんの体験をしてきましたが、皆さんに知っていただきたいところだけを映像で報告いたしました。

木村友美、我孫子中学校。

今井瑞萌、湖北中学校。

杉本美幸、布佐中学校。

綿引康一、湖北台中学校。

田中麻理沙、久寺家中学校。

横山耕介、白山中学校。

これで終わりにします。(拍手)

今、私たちが広島で体験したことを映像で見させていただきました。これから1人ずつ広島で体験してきた感想を話してもらいます。

○木村 今回、広島で戦争のこと、特に原爆について詳しく調べて、私は戦争がどれだけ恐ろしいものだったのかということを知りました。



今までは戦争があったという事実だけしか知りませんでしたが、実際に戦争を体験した方の話を聞いたり、資料館を見学したりして戦争の恐ろしさがわかり、もし今戦争が起ってしまったらと考えさせられました。

以前、広島に行ったことがあるという友達から、資料館や原爆ドームは一回見たら忘れられないと聞いていました。

しかし、私は予想以上の衝撃を受けました。特に8時15分を指したまま止まっている時計を見たときは、今までに味わったことのないような恐怖と驚きを感じ、しばらく時計の前から動けませんでした。そして、これからは絶対にそのような戦争を起こしてはいけないと思いました。

今、平和に関する憲法第9条を変えるかどうかという問題がありますが、今のような平和を保っていくためには、変えてはいけないと思います。この憲法について、広島へ行った体験を生かし、自分なりに考えていきたいと思っています。

また、平和のために自分には何ができるのか、これから少しずつ考えてみたいと思っています。(拍手)

○今井 私は戦後60周年ということで、広島を訪れ被爆体験談を聞きました。お話ししてくださった山崎さんは、原爆投下により自分の家とふるさとまでをなくしてしまいました。一瞬にしてまちが崩壊し、何千何万という人が死んでいく中、自分自身が生きることが奇跡であると何度も何度も繰り返し話していました。周りは死体や崩壊した家ばかりだし、自分自身も体中にたくさんの傷を負い、飲まず食わずの日が続き、もうだめだと何度も思ったそうです。

しかし、今現在、元気に過ごせていられるのは友達がいてくれたからだと言っていました。山崎さんの友達を大切にという言葉が胸に、地域の人々や仲間と協力し、平和に過ごしていければなと思います。とても強く印象に残っていて、私は戦争を経験していませんが、戦争はこの先繰り返してはいけないものだと思います。

被爆者の方をはじめ、広島の人たちは過去につらいことがあったからこそ、世界の平和を願っていると思います。

○杉本 私は広島へ行き、戦争の怖さを身近で実感することができました。あのきれいな広島も60年前には焼け野原になっていたこと、現地に行ってみるとそんなことがあったなんて思えない町並みでびっくりしました。そんな町並みの中にも争いがあったことを忘れない建物原爆ドームがありました。それを見て、広島に原子爆弾が落とされたことを改めて理解しました。

日本という国は世界中の国の中でただ一つ人類に向けて原子爆弾が落とされた国です。その怖さを知っている国が平和への訴えを忘れてはいけないと思いました。(拍手)

○綿引 僕は今回の広島平和記念式典へ参加したことでさらに平和への願いが強まった

と思います。

広島へ行く前は、原爆はただすごいとしか思っていませんでした。しかし、実際にその場所へ行ってみると自分の考えはこんなにも小さいものだったのかと実感しました。今回の派遣で一番印象に残ったのは、禎子さんの折鶴です。折鶴は知っていましたが、禎子さんという人は今まで知りませんでした。禎子さんという人は、あの有名な原爆の子の像のモチーフとなっています。

この広島での体験を生かして、平和への願いをみんなに伝えていけたらと思います。そして、山崎さんの言った「友達を大切に」という言葉を一番最初にそのときは言っていきたいと思います。(拍手)

○田中 私は初めて広島町の町並みを見たとき、山があるなど少し思ったくらいで、特に何も感じていませんでした。しかし、1日目、2日目と被爆者の方々のお話を聞いて改めて町を見ると、この復興は本当にすごいことなんだなと感じました。

私たちは原爆資料館を見てきましたが、私は正直、きれいにまとめられすぎているなど感じてしまいました。原爆の被爆者の方々のお話を皆さんにもお聞かせしたい。爆心地にはもう本当に何も残らず、少し離れたところでは生き地獄が何日も続く、全死体にウジがわき、あたり一帯が白夜のようになる。平和慣れしすぎた私たちには想像もつかない光景です。広島の人たちはそれからの60年間、必死に平和を訴え続けています。

しかし、今もなお世界には核保有国が存在し、日本の中でさえ戦争や原爆は忘れられようとしています。このままでよいのでしょうか。この経験を通して私が一番感じたことは、まず知る事の大切さです。世界を知る、戦争を知る、日本を知る、漠然としすぎている平和、その尊さに気づくべきです。今もなお世界で起こる戦争は決して人ごとではありません。

私はまだ中学生で説得力のある言葉も見つかりませんが、平和を訴え続けられる人間でありたいと思います。自分では何ができるかを考え、少しずつでも動いていきたいです。(拍手)

○横山 今回広島で資料館の見学、灯籠流し、被爆体験証言グループの幸元さん、山崎さんからのお話など、普段では余り体験できないような貴重な体験をさせていただきました。

これらの体験の中には、今までの自分の考えの想像を超えるようなものがあり、改めて戦争、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを感じました。その中でも被爆証言グループの方々からのお話で、「戦争は故郷をなくしてしまう」というのを聞いたとき、本当に衝撃を受けました。もう二度と戦争をしてはならない、自分たちはこの願いを、これからの世代に伝えていかなければならないと思いました。(拍手)

最後に、今回このような機会を与えてくださった市長さんはじめ、たくさんの方々にお礼を申し上げます。これから私たちは平和の尊さを大切にしながら、中学校生活を送るつ

#### 第4部 中学生の発表やリレートークの記録、講演録

もです。

本当にありがとうございました。(拍手)

これで、平和60周年記念広島体験の報告を終わりにします。(拍手)

○司会 皆さん、お疲れさまでした。もう一度中学生の皆さんに拍手をお願いいたします。

(拍手)

子どもたちのやわらかな心に平和という種がまたまかれたように思います。きょういらしてくださった方々と一緒にまた平和への道を行んでいきたいと思います。どうもお疲れさまでした。

少し早いんですけども、ここで15分の休憩をいただきまして、55分から第2部を開催したいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

(休憩)

○司会 それでは、皆様、第2部の開幕です。

リレートークに入りますが、本日出演していただく方をご紹介いたします。お1人ずつお名前を呼ばせていただきますので、どうぞ皆様拍手でお迎えくださいませ。

それでは、白山中学校、横山耕介君。(拍手)

湖北中学校、今井瑞萌さん。(拍手)

高校から出席していただいています、我孫子高校、中村晴香さん。どうぞ。(拍手)

中央学院高校、野澤夏奈さん。どうぞお越してください。(拍手)

地域にあります大学からのお招きです。川村学園女子大学文学部史学科、大金美佳さん。お願いいたします。(拍手)

市内で開業されておりますお医者様です。岩部弘治様。お願いいたします。(拍手)

もう一方、普段は都内に勤務されていまして、市民活動に積極的に出てらっしゃいます。子どもの活動の中で元気フェスタ実行委員長を何年もされました、長谷川宏伸様です。どうぞお越してください。(拍手)

広島で原爆による被爆をされたそうです。清水益雄様。どうぞお越してください。(拍手)

もう一方です、東京大空襲を体験されました、豊村美恵子様です。どうぞお越してください。(拍手)

本日、この9名の方がトークをしていただきます。

本日、このお話をコーディネートしていただきますのが千葉大学教授、中村攻先生です。先生、お願いいたします。(拍手)

よろしくお願ひします。

○中村(攻) 皆さん、こんにちは。後半の部分のコーディネートをやらせていただきます千葉大学の中村でございます。よろしくお願ひします。(拍手)

きょうは、先ほど6人の中学生の方たちのすばらしい体験をお聞かせいただきました。我孫子の市長さん及びここにご参加の方や多くの我孫子市民の皆さんに、こういうすばらしい青年たちを育てていただきましてありがとうございます。

私は、別に平和学で平和を専門にしている人間ではございませんで、都市計画、農村計画というまちづくりとか村づくりとかを専門にしておりますけれども、やはり学問の基礎は平和にあると思います。平和であってこそ人々に役立つ学問はできるというふうに思っ  
てこういう企画のお誘いを受けまして、地元の千葉大学からだれか参加する必要があるだろうというふうに思って参加させていただきました。よろしくお願いします。

私、この役目を引き受けさせていただきました。私と戦争ということについてちょっと考えてみました。私はちょうど戦中派といいますか、1942年に生まれて、戦争のさなかに生まれたんですけれども。私のお父さんは、もう亡くなりましたけれども、5人兄弟でした。考えてみれば、5人兄弟のうちで3人の男の兄弟のうちで1人が戦争で亡くなっています。それから、2人の女姉妹といいますか、女性の姉妹のうちの1人のご主人は中国で戦争に行っ  
て、命を第2次世界大戦で失っています。5人のお父さんの兄弟のうちで直接的に2人戦争の犠牲になっているんだなというふうに思いましたし、それからまた私自身も4人の兄弟がおりましたけれども、1人お姉さんが戦争の中で栄養を十分にとれずに病気で死ぬ、命を落とすというふうなので、直接戦争ではないけれども、やはりもっとすそ野は広くたくさんの人たちが犠牲になっていった。私も考えてみれば、身近に戦争の犠牲を抱えながら生きてきたんだなということを思いいたしたわけでございます。

第2次世界大戦だけでも300万人の日本人が命を落としたというふうに言われています。それはすごいことだったというふうに思います。

また、仕事の関係で外国にもたまに出かけていきますけれども、中国の上海に行ったときには、領事館の方に上海ではよく気をつけてくださいと、ここでは日本人が第2次世界大戦のときに1,000万人近くの方の命を奪ったところですよ。だから、そういうことをよく考えて行動してくださいねというふうな注意を受けたことがございます。

それから、フィリピンに行ったときには、マニラの市庁舎のちょうどホールの壁に絵がずっと書いてあるので何の絵かなと思って見ていたら、それは日本人の兵隊がフィリピンの人たちを虐殺しているという絵がマニラの市庁舎のホールの壁にずっと書かれていました。

韓国に行ったときには、公園に行きますと、やはり銅像で男の立派な方が馬に乗っているのが銅像で立っておりまして、これは何ですかと聞いたら、これは日本の侵略と戦った勇敢な韓国の人たちですよというふうなので。私はアジアを旅するごとに恥ずかしいとい  
いますか、大変なことを私たちはしてきたんだなと。私たちは忘れちゃっているけれども、そうやって残っているといえますか。

アジアでは第2次世界大戦だけでも2,000万人以上の人たちを私たちは殺した。千葉県  
の人口が600万人ですから、3倍、4倍近くの人たちをアジアで殺し、私自身が戦争で肉親に  
犠牲者を持つよりももっともっとたくさんの人たちが日本のそういう戦争の犠牲になって  
いった。そういう人たちがアジアの中にいっぱい生きています。そういう中で私たちは、  
どうやって生きていくのかということを考えてないといけないんだというふうなことを  
私自身も体験したので、ぜひ平和の問題をみんなで考えなくちゃいけないというふうにし  
てきょうは参加させていただきました。よろしくお願いします。

それでは、最初に、時間も限られておりますので、最初に戦争をどのように考えている  
かというそういうのを各パネラーの方に、戦争を私はこういうふうにとらえているという  
ふうなのを、若い順番にずっとお話をさせていただきたいというふうに思います。それが一  
通り終わったら、後半の部分として、じゃあ、戦争のない平和な社会を築いていくために  
今私たちは何をすべきなのかというふうなことについて今度は年配の方から若い方へと順  
番にご意見を聞くというふうにしていきたいとしたいと思います。

時間がないので、それでは横山君の方から、戦争ってどんなものということでご発言を  
お願いします。

○横山 今まで自分は戦争には余り興味がなくて、自分が戦争はただ怖いものだけしか  
思っていませんでした。しかし、今回実際に広島に行ってみて想像を超えるようなものが  
たくさんあり、原爆を落とされたときだけがつらいのかと思っていたのですが、その後も  
つらいというのが改めてわかり、自分が戦争を甘く考えていたことがわかりました。

それと、自分の中のイメージでは、戦争イコール原爆というのがものすごく強くて、広  
島の資料館で原爆の威力を見たときには本当に驚きました。

自分たちは、今平和というのが当たり前になっていて、戦争を知らない世代がどんど  
ん増えつつあります。最近起こったイラク戦争をニュースで見えてみて、人が人を殺し合  
うなんて絶対にあってはいけないものだと思います。

そして、今回広島に行き、戦争とは人間が人を殺し合うというだけの、何もこれからに  
つながらないものだと改めてわかりました。

○中村（攻） それでは、今井さん、お願いします。

○今井 私は戦争は人間が引き起こす最も凶悪な行為だと思っています。今年の夏、広島  
を訪れてさまざまなお話を聞いてきました。それに資料館の展示も見てきました。聞いたり  
見たりして、これ以上悲惨なことはないと思いました。

一つの原子爆弾がその場にいた人たちのふるさとを奪いました。また、一つの原子爆弾  
が人々の命を、またその人たちの大切な家族をも奪いました。でも、その原子爆弾をつ  
くったのも人間、その投下命令を出したのも人間。それに、戦争を始めたのも人間です。  
各国の偉い人間が始めたそういうことで、何も悪いことをしていない、戦争が始まって平

和を失った方々がたくさんいることがとても悔しいと思います。

ただ、あのときに戦争が行われ、敗戦していたからこそ今の日本があるのも事実です。憲法が改正され、人々の平和が約束されたのはそのことがあったからだと思います。平和な日本になったことは事実ですが、戦争で家族を亡くした方、自分が傷ついた方などたくさんいます。その方たちが体験した悲劇、戦争は日本が変わることのきっかけになったのですが、人間がたくさんの命を奪う最も卑劣な行為には変わりないと思います。

○中村（攻） はい、ありがとうございました。

それでは、高校生ということで、我孫子高校の中村さん、お願いします。

○中村（晴） 私は1人を殺せば殺人ですが、戦争では大勢を殺せば英雄としてたたえられるというのが戦争だと思います。戦争は人を人ではなくしてしまい、また人を人と思わなくなってしまうのではないかと思います。人間的な感覚を異常にさせてしまう。そして、殺しても悪いと思わない。殺さなければいけないというのが戦争だと思います。

戦争をやった結果、家族や友人や家など失うものは数多くあると思いますが、得られるものはほとんどないのではないのでしょうか。しかし、ものごとを始めるのにはすべて理由があるように、戦争を始めるに当たっても何らかの理由があると思います。政治的な理由や宗教的な理由、民族的な理由があり、そしてそのさまざまな理由が戦争に発展するのには戦争の後の平和を求めて戦争に発展するのではないかなと思う部分があります。

戦争とは互いの思想の考えや意見の考えから生み出されたものですがけれども、一人ひとり顔が違うように、考え方も一人ひとり違う。だから、争いがなくなるというのかもしれないけれども、そこを戦争という形で力で押さえるのではなく、話し合いなどで押さえることもできるのではないのでしょうか。そうすれば、平和はいつかは得られるのではないかなというのが私の戦争に対する考えです。

○中村（攻） はい、ありがとうございました。

もうちょっと時間を一人ひとりとっていただいております。

高校生のもう1人、野澤さん、お願いします。

○野澤 私は普段戦争ということを余り深く考えたことがありません。日本に暮らしていると今は平和なので、戦争と聞くと映画とかテレビとかで見ることで、現実には起こり得るものとして余り考えられません。

その中で、私が戦争について身近に感じたことは、2月に学校の修学旅行でハワイに行ってきました。それで、日本側じゃなく、アメリカからの戦争というのを見てきました。戦艦ミズーリを見に行った際に、特攻隊のぶつかった跡を自分の目ではっきり見てきました。特攻隊は命令によってみずからもう死ぬつもりで、自分と同じような年の人が船に突っ込んで行ったと思うと、本当に言葉ではあらわせない感情が生まれました。

また、ハワイの高速道路を走っているときに、車の後ろにリボンのマグネットがついて

いる車がたくさんあり、それはガイドさんに聞いたら、イラク戦争に行った米軍の家族が無事に帰ってくるようにという願いを込めて車にリボンをつけているということを知りました。本当にそのときに戦争が今実際に起こっていて、戦争に行った人を待っている人がいるんだという思いが実際にわかりました。

日本にいと、戦争というと余り昔のことということで、今起こっていることというふうなイメージは余りないので、すぐに生活の中で戦争のことを考えることはないと思うんですが、でも戦争は本当にいけないことで、人と人が殺し合って本当に悲しくつらいものだというものをみんながわかっていると思うのに、世界には戦争がなくなるのはなぜか私にはわかりません。戦争がよくないと思っている人が多くいるのに、何で戦争はなくなるんでしょうか。戦争をしているとだんだん国自体の中で感覚が麻痺してきてエスカレートしてきて、多くの人々が死んでいって、それで反省して、しかし、忘れてしまうとまた戦争が起こってという流れを人は繰り返してしまうんでしょうか。

私はそれを繰り返さないために、戦争のことをもっと多く伝えていくことが大事なことだと思います。

○中村（攻） ありがとうございます。

それでは、大学生を代表というわけではないですけども、大学生の大金さん、お願いします。

○大金 私は大学の方で文学部史学科に所属しているので、一応歴史を学んでいるんですけども。やはり近現代史を特に主に専攻しているんですけども。そこで、やはり戦争のことなんかもよく学んできたんですけども、このようなリレートークという機会を与えていただいて、改めてもう一度考えてみたときに、戦争をどのように考えているかと聞かれて、正直すごく悩んでしまって。やはり勉強してきて知識はすごく増えてきたと自分では思っているし、あと最近でいうとテレビでもイラク戦争のことなんかもそうですけれども、そういったことが取りざたされてすごく知識はあるんだけど、やはりきちんとは理解ができていないんだなということをすごく実感しました。

今までの方の発表でもちょっとあったんですけども、何が一番理解できないかということ、やはりどうして戦争を行うのか、どうして戦争はなくなるのかということが私にとっては一番理解ができていない部分でもあって。やはり戦争は悲惨なもので、今までそんな悲惨なことを何回も何回も繰り返してきているのに結局終わらなくて、戦争を行う側の人はいろいろと理由をつけて、一応大義名分があって戦争を行っているんだけど、なぜそのことを解決策が戦争になってしまっているのかということまではやはり理解ができていない部分が多くあります。

戦争をやめるにはどうしたらいいかということを実際にその戦争を行う人たちは考えているのかなということも最近のニュースを見て思っています。

やはり正直、戦争に対して実感がわからない部分もあって、知識と想像だけでしゃべっている部分もあるんですけども、でも、それというのはある意味幸せなことなのかなというふうに考えるところもあります。やはり戦争を知らない、戦争がないことが当たり前になっているというのは今までこの日本を築き上げてきた方々のおかげで、その方々が築き上げてきた部分に私は今立っているんだなと思うと、当たり前の幸せというのを最近はずごく感じるようになりました。

日本にとっての戦争ということやはり一番大きなもので第2次世界大戦がまず真っ先に挙げられると思うんですけども、60年ということあつと言う間のようにであり、でもやはりすごく過去のものでもあるので、どうしても忘れ去られてしまう部分というのはあるんですけども、やはりこういうふうに忘れたいものではあるけれども、忘れてはいけないものだとは思っているので、さっき言った当たり前の幸せに甘んじることなく、どんどん伝えていくべきだなと思います。

悲惨さを伝えていくことで将来本当にこういった争いがなくなっていくこと、なくすことにつなげていってもらえたらなと私は思っています。

○中村（攻） どうもありがとうございました。

それでは、次からお二方、子を持つ親の立場で、40代、50代の前半の方もみえますけれども、そういう立場からお2人の方にご発言をいただきたいと思います。

最初に、岩部さん、お願いいたします。

○岩部 私、30代と書いてありますけれども、実は40代で、若年医師ではなくて中年医師でございます。我々医者として町の診療所で診察をしているわけですけども、ひとたび戦争が起こったらどういふふうになるかということを考えるわけですけども。例えば何か具体的に戦闘行為が近くで起こる、それから私が徴集されて戦場に行くということになれば、恐らく医療技術を生かして傷ついた人を助けるという行為をするんだろうと思いますけれども。なかなかそういうことすらできないような状況になってしまうというのが戦争なのかなというふうに私は思っています。

私は、主催者の方知ってらっしゃるかどうかわからないんですけども、長崎大学の医学部を卒業しております、出身は東京なんですけれども、どこかちょっと親元から離れて遠いところへ行きたいと思ひまして、長崎で6年間大学生活を送っております。私はもちろん長崎に原爆が落つたことは知っていましたけれども、自分が入学した大学が原爆で壊滅されたということはちょっと知らなかったんです。入学をして、教授の方から長崎大学の歴史についてのレクチャーを受けて、初めてそういう悲惨な状況があるということがわかったわけです。

長崎大学の医学部は、ちょっときょうは広島の話ばかりなのであれですけども、爆心地、私もずっと爆心地の浦上天主堂の横に下宿していたんですけども、爆心地から700



メートルから800メートルの位置にあります。長崎の北側の位置にあるんですけども。長崎市で一番大きな病院で、長崎市のメディカルセンターの役割を果たしているというところでした。

長崎の方は空襲がなかなか少なかったものですから、医療班が組まれて大規模な活動をするということはなかったわけですけども、一応長崎医大を中心として整然と空爆が起こったときに医療を行うというシステムを完璧に築き上げているというところだったわけです。

ところが、いざ原子爆弾が投下されてみると、何しろ爆心地から700メートルから800メートルの位置ですから、長崎医大は最も被害を受けやすい位置にいたということでございます。大体長崎医大に当時いた職員の方、学生の方、患者さんの方を合わせると、恐らく千数百名の方が大学の建物の中にいらっしゃったと思うんですけども。建物によっても被害の状況は違うんですけども、例えば大学生の1、2年が基礎医学といって生理学とか余りお医者さんの診療行為とは関係のない基礎知識を学ぶ校舎、それは木造の校舎であったわけですけども、それと患者さんを治療するための大学病院というのが2地区に分かれて立っていました。その大学病院の方はコンクリート造りの大変立派な建物でございまして、場所によっては厚さ1メートルというコンクリートの厚さがあったわけですが、その基礎校舎の授業をやっているところの校舎というのは木造の校舎だったわけで。原爆の爆心から大体800メートルだったんじゃないかと思えますけれども、落ちて一瞬にして壊滅すると。壊滅というのも、丸焼けというわけじゃなくて、ぺっしゃんこです。校舎が全部ぺっしゃんこ。救護隊が入ってもどこに何があるかわからない状態。学生は飛ばされた建物の、机が焼け残ってあるんですけども、その上に焼けた学生が整然と座っている状態。教授は教壇の上で黒こげになっているというような状態で発見されると。基礎校舎での学生と教授の死亡率はほぼ100%だというふうに言われています。

悲しいかな、長崎医大には当時軍医を養成するための臨時医専が敷設されていまして、たくさんの学生がいたわけですけども、その名簿すら失われてしまっている状態です。長崎医大の事務局も吹っ飛んで、長崎医大の名簿を管理していた市の建物も吹っ飛ぶということで、学生にどういう学生がいたのかということはわかっているんですけども、その方がどうなったかという詳細な調査すら今もってわからないところがあるというような悲惨な状況でございます。

それから、大学病院にいた先生の方もかなりの数は亡くなったわけですけども、生き残った方もごく少数おられた。私が学生のときには、その被爆した教授という方がいっぱいいらっしゃったですね。全身ガラスが突き刺さったような状況で救助されたような方、それから何とか原爆の灰塵の中を生き残ってきたような教授の方から直接教えを受けたという状況であります。

そういう状況を記録した詳細な記録史というのが長崎医大の方でつくられていまして、私も入学してから結構それを、興味を持ってというんじゃないでしょうけれども、どういう事態が起こったのかということ勉強させていただいた。

そのときに起こった人体、医学的な被害、それから何よりも医療活動ができなくなる。長崎医大も壊滅しましたし、自分たちの先生も学長を含めて死んでしまったわけで、身内の介護だけで手一杯。身内の介護もそうですけれども、家族の方も亡くした方が多いという形で、何の医療活動もできない。ですから、原爆が落ちた浦上地区で残った病院はわずか一つ、浦上第一病院という病院が残って、そこが細々と活動をやっている状況でしたけれども。医師の大半が活動不能になる、医療物資が使えなくなるというような形で大変悲惨な、医療的に悲惨な状況を受けるということです。

ですから、戦争が起こって我々が巻き込まれて何かあっても、医者もやはり巻き込まれるわけですから救助は期待できないというそういう悲惨な現実があったということを知りました。

それから、戦争とはどういうものかというのは、それは戦争に遭った人、戦争を起こす人、立場によっていろいろな違いはあるというふうに思いますけれども、少なくとも我々が戦争に巻き込まれる方に恐らくなってしまうでしょうから、そういった立場からすると非常に悲惨なものであるということをご理解いただきたいというふうに思っております。

以上です。

○中村（攻） ありがとうございます。

もう1人、長谷川さん、お願いいたします。

○長谷川 長谷川でございます。私は実は青森県弘前市というところで昭和30年に生まれました。昭和30年といいますと戦後10年、ちょうど神武景気とか景気が上向いてきたころですね。まだまだ田舎でしたので、実は今みたいに豊かかといいますと必ずしもそうではなくて、まだまだ貧乏というか物資の行き届いていない状態。例えば学校ですと脱脂粉乳、懐かしくお聞きになる方もいらっしゃるかもしれませんが、決しておいしいものではなかったですね。だけれども、実は世の中自体は落ち着いていた、ものはなかったけれども、ある意味では平和だった。そのかわらでは実は朝鮮戦争とかやっているわけですね。それから、もう少しするとベトナム戦争とかが始まると。

そういった意味で、ワールドワイドで見ればあちこちで紛争が続いている中で、一部田舎で平和を享受していた。これは、弘前というところは実は空爆に遭っていない場所です。なぜそうだったのかというのは、当然攻める側の方の理屈を聞かなければわからないわけですが、逆に言うと、戦争自体がそういうふうに恣意的にコントロールされるような状況になってもやまない、止まらない状態にあるということもある意味では言えるのではないのかなと思います。本来だったら真っ向勝負であったら、それこそどちらかが亡くな

ってしまうまでというような形、よくテレビアニメなんかはそんな感じがしますけれども、それもまたそれで悲惨です。用もないのにただひたすら偉い人がギブアップするのを待つためだけに空爆が続くとか。ないしは、今回話題になっています広島、長崎の原爆についても、これが戦争を終わらせるための一つの機会というか、そういったふうに捉えられているというのもまた事実だと思います。

確かに悲惨な結果だったわけですがけれども、その悲惨さが起こす側の論理、ないしは戦争をとめる方の論理になっているのかというのが、本当にそれで効くのかというのが、平和の中にいる我々一般の人間からすると、本当に高いところで、高次元のところでそういった抑止力効くのか不安なところがあります。

ただ、でもそれを訴えていかないで何も変わるわけではないので、我々自身が普段からそういうふうな悲惨さをよく理解した上で、起こす側に加担する、しない、これがあるいはちょっとしたきっかけでなる可能性も持っています。ですので、その辺のところを我々自分がしっかり押さえておかなければいけないのかなと思っています。

それから、実は原爆のもとになっている理論、相対性理論ですが、 $E=mc^2$  という方程式、実はこれ1905年、ちょうど100年なんですね。といった意味で、ちょっと話はずれますけれども、この $E=mc^2$  のいきさつの本もいろいろ出ています。その中で、ドイツとアメリカが開発競争続けている中で、ほんの数カ月程度の差でアメリカの方がこれを手にした。ドイツは残念ながら、原料の一つをつくるのが手間取って実用に遅れたというのを本で読みまして。もしドイツがこれを手に入れていたらどうなったんだろうな。これは先ほど言いましたように、始めた側の論理、やめる側の論理がアメリカの場合とまた違うように効いたのではないかな。

きょうはこちらに清水さんいらっしゃっていますので、その悲惨さを、私、抑止力だというふうに思っていないんですが、現実問題、もしドイツ軍が使った場合に、ユダヤ排斥という明確な思想を持っている人たちがそれを戦争を終わらせる道具と使わずに、自分らの優位性をより確保するために使ったというふうにもしたらえらことができたとしたらそれはとても怖いことだと。逆に言うと、もしそんな状況になったときに、歴史は当然変わってくると思いますけれども、我々日本人がその悲惨さを実体験として同じように共有できるのかどうかということも振り返ってみる必要があるのかなと思いました。

いずれにしろ、集団心理やいろいろな要素が重なって戦争が始まります。そういった怖さも含めまして我々がまたこうやっていろいろなふうに戦争とか平和ということに対して語り合うのは非常に大事なことだと思います。私自身の結論も余りはっきりはしませんが、いずれにしろこういうふうに語り合うこと自身がまず大事なのかなと思っています。

以上です。

○中村（攻） ありがとうございます。

続きまして、お二方、体験者のお話になっていくと思います。

最初に、東京大空襲の体験者でおられます豊村さんの方から、少し時間をとっていただいても結構ですので、お話をお願いします。

○豊村 私は豊村です。東京大空襲を経験した者です。私は東京で生まれて東京で育って、大空襲の被災に遭ったんです。3月10日で、一夜にして頼る家族4人、両親、弟、姉、そして家もすべて失いました。私はたまたま勤め先の泊まり勤務で不在でしたので命拾いをしたわけです。

その日から着の身着のまま、下着1枚もなく、上着もないし、お金もなく、どうして生きていったらいいのか考えられませんでした。そして、親を探しに行くために焼け跡を歩いたんですが、その焼け跡はすさまじくて、下町一帯は360度見渡す限り焼死体、焼けた人の死体、それも真っ黒けに焼けた人ですね。10万余人が一夜で死んだという、そういう人たちの灰骨、灰と骨だけなんです。

この都市空襲こそ、そして猛爆撃されたということは焼夷弾によるホロコストではないかと私は思います。ドイツでは施設の中で大量虐殺をしましたが、東京の下町では4キロ四方に四角く最初に焼夷弾を落としまして、逃げ道をふさいでおいて、その真ん中に今度は何万発という焼夷弾を落とします。だから、そこにいる人たちは逃げられないわけですね。それで、焼夷弾も一番最初に消防署をねらうんですね。消火機能をふさいでしまう、そういう作戦が実に緻密に行われていたわけです。そこが燃え尽きると、今度は次の4キロ四方に移動して行って、一つでも爆撃するものがあったら編隊に帰って来なくてもよろしいと、それを爆撃してから帰って来いという命令をされていたということです。

そして、私の家族が深川の海へ逃げたんですが、海中が盛り上がるほど水死体が浮いているわけですね。皆さん逃げ場がないものですから、川とか海に逃げ込んだわけです。だけれども、そこで溺死した人たちは着物姿のまんまで死んでいますから、灰骨で黒こげになった人よりは何か余計人間味があるものですから、そのあわれさがすごく印象的で、つらく、憐れみを感じました。それで、私はそういう人たちを見ながら涙が出なかったんですね。これほどまでに人を痛めつける悲惨な災害に心の傷が深く、悲しみを超えて、憎しみとなって生涯忘れられません。

そして、8月3日、国電の中で機銃掃射を受けまして、右手重傷し、切断の障害者になりました。戦後の60年間、私は隠しようのない障害を人目にさらして不自由、不便さに耐え、そして偏見、差別の試練に耐えながら生きてきました。

そして、被災に遭ったときの生死を分けた苦しみは残された者の険しい人生が語られなければ、戦争の残酷さはわかりません。私はたまたま障害ですけれども、障害を持たない人、孤児、それから孤児でなくても一般の家族の人も親戚、身内を失ったものつらさ、

その人が60年間どんな思いをして生きてきたか、そういうものがやはり語り伝えられていかなければ戦争の当時の場面だけでは語り尽くせないのではないだろうかと思います。

そして、なぜ自分だけがこんなつらい思いをしなきゃいけないのか、何がそうさせたのか、なぜなのか、本当のことを知りたいと私は思い続けてきました。そして、今年3月8日、アメリカの退役将校、アールジョンソンの証言によりますと、この方はB29に搭乗していきまして、東京大空襲に参加した人です。そして、東京大空襲がアメリカは正当化しているのはなぜかと、女性や子どももいた民家を攻撃し、民間人にも多数の死傷者を出したのではないかという質問に対して、どの戦争でも民間人、子どもも傷つくのではないか。アメリカは勝利するために戦争に参加したんだと。戦争はすべてが人道的なものではない。大空襲が正しかろうが、間違っていようが、必要な行動だったんだ。もしこの行動をとっていなければ、歴史はもっと悪い方向に向かっていただろうと。だけれども、3月10日にはもっと大きな軍需施設があったのに、そこは攻撃しないで一般市民の、住民の都市爆撃をしたのです。なぜそういうことをしたのかということについては、いろいろアメリカの戦術的な問題があると思います。

それで、戦争は正義の延長で起こります。政党政治を廃止して軍事政権へと進んで、皆兵制、強制的に赤紙ではがき1枚で徴兵して、勝てば官軍の正義を抱えていました。1944年には軍事的に勝ち負けの見通しが立っていたのに軍事政権は敗北を認めません。国家はそのためにズルズル負け戦をしたために自己崩壊したのです。そして、300万人もの日本人が犠牲になりました。

日本は、海外の資源を求めて侵略したのに、米英鬼畜と戦う聖戦だと教えられました。アメリカは自由を守る戦争、正しい戦争のために武力闘争だったんだと言います。日本は、外国を知らないから負けたんだではなくて、外国を知らないからこんなばかな戦争を始めたんだというべきだと言う人がいます。

終わりに、過去の過ちを再び犯さないためには、自分は何が知りたいのか、ものごとの本質を追求して、真実の歴史を学び、教訓としていきたいと考えます。

以上です。

○中村（攻） ありがとうございます。私も豊村さんがお書きになった本を送っていただきまして見せていただきました。本当にもっと、今の言葉ではあらわせない悲惨な状況、それから豊村さんがその後考えられたことが記されていますので、もしお買い求めになられる方がいたら、多分受付のところにチラシが置いてあると思いますけれども、読まれると状況がわかるなというふうに思います。

川へ大空襲でみんな逃げて、川しかないというので川へ入っていくわけですね。そうすると、次から次へと川へ入っていく人がふえてくるわけですね、災難を防ごうと思つて。そうすると、最初に入った人はだんだん押されて深みにはまっていく。そうすると、

溺れ死んでいくわけですよ。順番に溺れ死んでいくといますか。こういうふうにしてやはり川が我々を救わないといますか、次々入ってくれば深みへ深みへとだんだん追い込まれていくといますか。そして、足が届かないところまで来たときにやはり命を絶つていくというようなこともずっとその情景は読んでいるとわかるというふうに思います。

それでは、もう1人、広島で被爆体験をされました清水さん、よろしくお願いします。

○清水 清水でございます。今、60年前の8月6日、当日、今の時間に何をしていたかとふっと思い起こしながら、さあ、戦争とはどういうものだったかということと合わせて考えているんですけども。私も広島でちょうど学校の大型の木造建築の教室で被爆しまして、校舎はもちろん風のために倒され、その下敷きになったわけです。ところが、瞬間、マグネシウムをたくようなピカッとして、あとしばらくの間気絶をしております、全然わかりませんでした。それが1時間だったのか2時間だったのか3時間だったのか、全然記憶にございません。ところが、ある時間がたってふっと気がつきまして周りを見ますと、うなり声がまだ1人、2人ありました。そして、自分で見ますと、片腕が千切れんばかりに大きな傷を持っておりまして、人を助けるというようなそういう体力というか、体ではなかったものですから、もう崩れた階段、机の間をやっとの思いではい出して校庭に出たと、そんなふうな状態で。私が今日生きておりますのは、幸いにして火事が起こらなかったんです。あれで火事が起こっていますとちょうど火葬場に体を預けたような状態になって現在は灰になっていると思いますけれども。そんなような経験をして。

そして、気がつきまして、放射線の充満をする、ちょうど私は爆心地から2キロのところですから、ちょうど赤十字病院というのが500メートルぐらい離れたところにありまして、もう無意識に治療を受けるためにさまよい歩きました。もちろん赤十字病院は全滅ですから、何の治療もなく。そのうちに意識がはっきりしてきて、親が爆心地から3キロぐらい離れたところに住んでいたものですから、親を思い出して、午後だったと思いますね、もう昼過ぎだったと思います。うちに帰りました。それで、あわてて両親に会って、両親があわてふためいて、近所の8割ぐらい倒壊した外科医に連れて行ってくれたんです。周りは死体の山でした。その中で治療を受けるといっても、うっすらどういう状態だったのか、記憶、夢のような感じですね。はっきりした輪郭も何もない人たちの間に立って仮の治療を受けたと。その医者いわく、これは場合によったら、左手なんですけれども、切断をしなきゃいけないかもしれないと、そんなふうな診断を受けたんですけれども。

そういうような経験をして、戦争とは一体どういうものだ。当時は、戦争というのは起こってしまえばもう異常心理といますか、どこへでも周りからワーワー言われた方の体制に全部従わざるを得ないような状態。そういうように追い込まれていきますから、もう現在のテロの自爆、自動車の爆弾自爆ですね、ああいう形も恐れられないような神経に追い込まれます。それと、勝ち戦の人はどんどん残虐になります。軍事施設だけをねらっている

というような形から、今度は市民を殺そう、弱いものを殺していこう、抵抗しないものをどんどん殺していって手を上げさせようと、もう際限がありません。

ですから、私の反省は、戦争はいかなる理由があってもどうあっても止めるべきだ。絶対に戦争に追い込んじゃだめだというのが当時の反省、現在でもそう思っていますけれども、現在の生き方がどうなのか。先ほどから皆さんもなぜ起こるのか、どうして起こるか、どうしたら止められるかと、戦争というものは理解できないということをおっしゃっていましたけれども、そんなような状態に戦争というものはみんなを追い込んでいくと。

それで、アメリカあたりの例をとりましても名言名句があるんです。ベンジャミン・フランクリンなんか言っています。よい戦争、悪い平和、こんなもの一度もあつた試しがない、というようなことを言っているながら、やはり同じことを繰り返しているんですね。

それから、例の暗殺されましたケネディ、35代のアメリカの大統領ですが、人類は戦争に終止符を打たなければ、逆に戦争で人類が終止符を打たれるんだと、戦争なんて絶対やめるべきだ、しちゃいけないというようなことも言っているわけですね。

原爆を投下した、それに賛成をした、さっきもお話ありましたけれども、アルバート・アインシュタインですね、相対性原理、よく私わかりませんですけども。その人たちがアメリカのルーズベルトに対して、ドイツがもしこういうものを開発したら大変なことになる。だから、早くその前に開発をしてつくりなさいという推薦の手紙を出しているんですね。それで、広島とされた後10年ぐらいたって、すごい反省しています。これは私の人生の唯一の誤りであった。こういうものを手紙を書いて署名したことについて深く反省をしておるといような立派な方、偉大な学者がたくさんおられる。にもかかわらず、戦争は依然として起きてくる。

ですから、私ぐらいの個人でこうしたら戦争は止まるんだ、やめられるんだというような手段、方策、そういうものは思いつきません。ただ耐えて、こういう愚かなものはしないんだと、一人ひとりの胸にこういう戦争に対する嫌悪感、反対、そうした意思を十分に持っていただくということがやはり最良の手段じゃないかと。いくら大勢の前で1人の人が叫んでも同じことです。そういうことをこの長い人生の間で感じましたのをひとつ最後の言葉にしたいと思います。

○中村（攻） ありがとうございます。

これで一通り戦争についてのそれぞれの戦争観といいますか、お話をいただいたわけですけども。特に若い人たちの中で、今の戦争体験なんかのお話を聞いて感じるものがあつたらちょっと発言をしてみてくださいか。

どなたからでもいいんですけども。どうでしょうか。中村さん、どうですか。今の戦争の体験のお話を聞いて、何か感じるものがあつたら。

○中村（晴） お話を聞いて、知らない部分も、やはり私とかが知っている戦争について

はテレビで知ったり、おばあちゃんから聞いたり、学校で授業で習ったりというだけで、実際被爆とか空襲に遭った方の話を聞くという機会はほとんどなくて。聞いたら、実際そんなことがどういうふうになって、起こったときの現状というのを初めて知って。やはりあってはいけないなとより一層思いました。

○中村（攻） ほかにどうですか。野澤さん。

○野澤 日本は戦争、たった60年前に起こったことなのに本当にこうやって話を聞いていても、自分が暮らしている日常とは違いすぎて話をいくら聞いても現実的に考えにくいという部分があるので、もっと戦争について知らなくてはいけないと、知れば知るほどもっともっと知らなくてはいけないと思いました。

○中村（攻） 中学生はどうですか。どうぞ。横山君、どうですか。

○横山 お話を聞いていて、原爆が落ちたとき、自分に起きたことに何もかも従わなければいけない状態に追い込まれるというのは相当な状態だったと思いました。そんな状態にさせるような戦争の原爆というのはものすごく恐ろしいものだと思えました。

○今井 広島に行って聞いてきた話だけじゃなくて、やはり一人ひとり体験していることが違って、新しく知ったこととかもあったので、すごくもっと戦争について深く知りたいなと思えました。

○中村（攻） そうですね。我孫子にも体験された方がこうやってみえるんですね、戦争を。

大金さん、どうですか。

○大金 先ほどの話を伺って印象に残ったのが、いい戦争、悪い平和というものはあり得ないという発言があったと思うんですけども。それは全くそのとおりで。私が記憶している中では、イラク戦争を開戦するときにブッシュ大統領のコメントのときに、正義のためとか、とにかく戦争をすごく正当化している発言が多く見られたんですね。私の考えでは、戦争をすること自体、もう戦争を行うということ自体が私にとってはもう、それはもう悪というか悪いことだと思っているので、ものすごいショックを受けたのを、今お話を伺っていて思い出しました。やはりその戦争を正当化しているようでは結局戦争はなくなるんだらうなということをおもいました。

以上です。

○中村（攻） 若い人たちのご発言を聞いて、どうでしょうか、お父さん、お母さんなり戦争体験者の方。どうぞ。

○岩部 この第1次世界大戦のことはともかくとして、戦争が起こる原因とか理由を正当化しているというふうに言われてきて、まさにそのとおりだと思うんですけども。やはり戦争をやるには理由があるんじゃないかと思うんですね。その理由というのはいろいろな紛争を見てみると、やはりかなり経済的な問題が多いんじゃないかなというふうに



思います。結局イラク戦争にしても、あれ何やったかという、アメリカが石油の利権をもらって膨大な物資を動かして経済を活性化させて、復興も全部アメリカがやっているという事態ですから、もうけたのはアメリカなのかなというような感じですね。それから、ほかもそうですね。アフリカの貧しい国で内戦が起こったりしているという現実があるわけですけども。内戦が起こると何が起こるかという、武器がいるわけですよ。武器を使用する。そうすると、武器をつくっている会社がもうかってくるわけです。戦争の規模が拡大すればするほどもうかるというような形で、戦争でたくさんの人が悲惨な状況で亡くなったり傷ついたりというその悲惨な一面がある一方、戦争をやりたい人は経済活動としてやっているんじゃないかというような感じがするわけです。

ですから、そういう経済活動、経済がグローバル化していてそういう形で貧富の差とか経済の勝ち負けという形で戦争が優位にされて誘発される、実はそういうものが根底にあると。そうしたところで勝ち組がもっとほしいという形でその他の国を攻めるとか内戦をしかけるということが起こる構造が最近少なくとも多いんじゃないかなというふうに思います。

そのために例えば大量兵器を隠し持っているんじゃないかとか、あなたの国は独裁国家である、それは事実なのかもしれませんが、そうした理屈をつけるということがまかり通っているような気がする。そうした現実というものを我々はもう少しよく見つめていくというか、それでいいのかどうかということを考えていく必要があるのかなというふうに思っています。

○中村（攻） ありがとうございます。

豊村さん。

○豊村 今ね、経済的な問題があって戦争が起きるのではないかと、やはり日本は自然の資源がないから、あるのは技術力とその知恵なものですから、どうしても資源のある国に対してやはりその資源がなければ日本も経済的になりゆかないから。イラク戦争というのは何が原因でイラクに援助したかといったら、莫大な石油があるんですね。だから、イラクに協力しない人は戦争が終わっても石油の発掘とか貿易に参加させないというのがブッシュの方針だった。それに乗ったのが小泉首相だと思います。それで、イラクに莫大な援助資金を一生懸命送っている。そのために国債をどんどん発行して嫌というほど借金を日本はつくっている。だけれども、日本の経済界は全国の経済界の団体が小泉首相のそういうやり方を後押ししているんですね。なぜ後押ししているかという、賛成だからやれやれと政治献金を一生懸命つぎ込んでいるわけ。

今ちょっとそこの先生がおっしゃったように、経済界というのはそういう戦争があれば軍需品ですね、戦車とか自動車、貨物とかトラックとか船とか、それから機関銃とか弾とかそういうものをどんどん日本国内で生産する。生産したものが人道的援助だといってイ

ラクに持ち出されているわけですね。だから、そういうふうな形で経済的な面で恩恵がものすごくあるわけですよ、経済界は。それで、犠牲を伴うのは市民なんです。戦うのも一般市民、それからその税金を払うのも一般市民。そして、家を焼かれるのも一般市民というふうなことを中江兆民が言っていた。戦争があるために一番災難を受けるのは市民だというふうな言い方をしています。

だから、今おっしゃったように、政治と経済というのは密接な関係があってすごい政治献金して水増しして20億ぐらいの水増しをして、それがばれて返したというけれども、政治家には相当な袖の下が使われてるんじゃないかなと思います。

それから、もう一つ、戦争というものをよく知らない、経験してないからもっと勉強したいという若い人のご意見がありました。東京でも東京大空襲でああいう広島、長崎みたいに原爆記念館をつくって、そこでいろいろなものを展示して勉強する施設があるわけで、東京でもどうしてもそれをつくりたいということで、年々少しずつ東京都から助成金をもらって品物を集めていたんですね。ところが、石原知事になってから、そんなものは一切やらないと、むだだと。今までためておいたのが、東京江戸博物館の地下に、その地下に置いておいたものを全部引き払えと。引き払わなきゃ全部ごみ捨て場に運んでしまうよと言って脅かされて、そういうものを集めていた人たちが1年間倉庫代を払いながら苦勞してきたわけです。それでも倉庫代が高くてやりきれないので、4,000人の募金を集めて東京の砂町に東京大空襲戦災資料センターというのがあるわけです。これは民間でボランティアが運営しているものですから、その運営資金がすごく維持しているのに難儀をしているわけですね。

東京で焼け野原になって灰骨が埋まっている土地の上にハイテクビルが今いっぱい建っているわけですよ。すごく経済的な恩恵を受けている企業の人たちが知らん顔しているというのは、私は何としてでも我慢ができないんですね。そういう人たちも含めて、官、民、業が協力してそういう資料センターを設立して、祖先を敬い、悼み、そしてそういうことを二度と繰り返さないという施設を社会貢献してほしいというのが私の願望なんです。いまだにそういうことはしてもらえていない。

だから、もし勉強なさるんだったら、東京大空襲資料センターというところがありますから、民間で運営してすごく良心的な運営をしていますので、ご見学いただけたらと思います。どうもすみません。

○中村（攻） はい、ありがとうございました。

それでは、後半の部分に移っていきたく思いますけれども。皆さん、いろいろなことを、戦争って何かということについて、もうお話は、では、平和を守っていくためにはどうしたらいいかということに話も及んでおりますけれども。戦争って何かという前半部分についてはそれぞれ皆さんこのご発言の中から感じになっていることだと思いますけ

れども、私なりに簡単に感想を述べさせていただきます。

やはり、戦争というのは人間を狂気にしていくという、だから、非常に戦争状態になったら異常心理になっていくわけで。今若い人たちの中から戦争ということをやなかなか実感できないというお話がありましたけれども、実感できるようになってからでは遅いのだということですよね。それが身近に感じられるようになった状況の中ではもう全体として非常に社会の一人ひとりの人間も非常に狂気化していくというふうなので、実感が持てないといいますが、今やはりそういうことをさせないということをしないと、それが近くなってきたり戦争に入っていったからいろいろな人道的なことをやるなんていうことはとてもできるものではないという、そういうものなんだという事前にそういう戦争をさせないということが戦争にとっては非常に大事なことなのだとすることを一つ感じました。

それから、二つ目は、戦争によって犠牲になるのは戦争をする軍人だけではないということですよね。広島や長崎でも10万、20万人という住民の人たちが犠牲になって命を落としていく。現に今起きているイラク戦争でも、イラクの国民が10万、あるいは数によっては20万ともちゃんとしたデータもないほど多くの住民が犠牲になって命を落としていくという。米軍の方も1,000人ぐらいは亡くなっているんでしょうけれども、軍人よりもはるかに住民が命を落とし犠牲になっていくんだという、そういうものなんだということ。

それから、豊村さんも言われましたけれども、戦争によって生き残った人たちの中にも大変大きな辛苦をその後残していく、苦しみを残していくものなのだというふうな意味で、戦争というのはそういうものなのだとすることで。勝つためには何でもやるということですから、東京の人々が住んでいる何の罪もない、戦争に直接関与しないような住民が住んでいるところにもものすごい爆弾を落として、10万という数で住民を犠牲にしていくということが平気で行われるんだよということですよね。だから、戦争というものはそういうものと。

イクラ見てもそうですよね。テレビなんかで見ていると、映ってくる画面はまちががらくたですよ。決して軍人同士が、戦争やっている人同士が戦っているというよりも、圧倒的に多くの住民が犠牲になっているという。そういうふうなものなのだとすることが二つ目にはやはり考えなくちゃいけないというふうに思いました。

それと同時に、戦争というのは、若い人たちから言われましたけれども、若い人たちが特に出ていましたよね、人が人を殺す殺人行為なんだと。個人が人を殺せば罪になるけれども、国家がやる殺人行為ですよ。だから、そういう意味では何も生まないと、人の幸せは、ということです。だから、そこから絶望感に陥るのではなしに、やはり人間が起こしているものですから、人間によってなくしていくことができるんだという、自然現象ではないと。地震とかそういうふうなものではないという、人間が起こしているものですから、やはり人間によってそれはなくしていくことができるものなのだというふうなもの

も私たちはやはり希望を持っていかなければいけない側面なんだというふうに思います。

そういうことも踏まえて、今度は後半部分で、では、そういうふうにして戦争のない平和な社会を築いていくために私たちは何をすればいいのかというふうなことについて少し考えていきたいと思います。

ここは年配の方から、今度は逆にお話を聞いていきたいというふうに思います。

清水さん、よろしくお願いします。

○清水 我々被爆者だけでなく、廃絶という言葉をよく使います。核兵器の廃絶。これは言葉としては簡単に言えるんですけども、実際は、今我々が広島、長崎で受けた原爆の破壊力、威力、これを現在保有しているものと対比しますと、今地球の人口が63億ですね、余るんですね、今の核弾頭を全部使いますと。それで、地球上には1人もいなくなると。そう簡単にはいきませんが、数字的なそれやりますとそういう状態になっております。これは、ある県議会議員のレポートにもありましたけれども、核弾頭が今15,000か6,000基ぐらいあります、世界中に。世界中に配備されております。さて、この核を廃絶させるにはどういう方法がとれるかどうか。並大抵のことではありません。

それと、もう一つ、水素爆弾、これも原子爆弾の一種ですね。これも100メガトンの。これは今平和事業に関して文集を事業の委員会でもとめておりまして、そこに投稿されている方がまだ未発表です。私があえて引き合いに出させていただきますけれども。100メガトンの水素爆弾というのは、仮に東京の上空に1発落としますと、4トントラックで2,500万台のトラックに火薬を満載して火をつけた状態になると。そうすると、都民1人頭2台半の爆弾を背負うことになるわけですね。それを身に受けて破壊されちゃうと。そういうようなものまでできております。

こういうことを踏まえて、核兵器の廃絶というのをどうとらえていくか。それで、それをいくら言ってもこれはなかなか結論が出ませんので、平和を構築する平和の砦、これ一ついい例えというか、ユネスコって皆さんご存じですね、国連の教育科学文化機関ですけども。その中の憲章の中の一節に、「戦争は人の心の中で生まれるものである。だから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。」となっております。これはまさに教育であり、科学であり、兵器ではありませんよ、科学であり、文化であると。そういうものによって心の平和を築き上げると。要するに文化力ですね、そうしたものを築き上げることによって、戦争をなくするというよりも、そちらの方に全人類が向いていくと、そういうような形が一つの手段になるのではなかろうかと。

卑近な例で、この前の民主党の党首、前原誠司さんですか、フツと言っておられました、テレビで。今問題になるのはエネルギーの問題と食料問題であると。エネルギーのある先進国のようにがぶ飲みたれ流しですね、こんな使い方をしていたのではもう、埋蔵量が無限にあるなんていうのはとんでもない話で。去年、2年ぐらい前から石油の価格なんて3倍

に上がっています。私は石油会社の出身ですからエネルギーの問題このぐらいにしまして。

食料問題の方ですね。食料の問題でも平均してアフリカあたりには毎年何百万人という人間が死んでおりますね。一方、先進国はもうがつつきですね。それで、余ったものは遠慮なく捨てると。それで、何で苦しんでいるかという、年を取って肥満で苦しんでいる。そういう状態になっております。そういう形のものを、日本でもなかなかこういうものは進んでおりまして、食文化を取り上げて研究して、推進し、そういうもので懇談会を開いて、12億の、向こう5年間で日本食人口をふやしていこう、そういうようなことは社会貢献できるんじゃないだろうか。自衛隊の派遣で国際貢献をしようと言っていますけれども、こういうものの食文化を高揚し、食料不足をいろいろなもの研究をしながら総合的に考えていけると、まだまだこれは世界貢献ができる日本の技術があるんじゃないだろうか。

ご承知のとおり、日本は世界一番の長寿国です。食料がものすごく影響していると思います。そういうような形のものを食文化としてとらえながら、先ほどのユネスコの話じゃありませんけれども、平和の砦を築くのは食文化で築いていけると。これは1方法ではなかろうかと、そんなふうに私はポツと考えたところでございます。

それと、食育というのは、身近なところで千葉県で県知事さんが一生懸命やっておられます。それで、そういう形のもので子どもに食の栄養のバランスをうまくつけて、給食あたりでもって十分に育てあげ、それをつくる人に感謝の気持ちを持たせる。それでハイカロリーの、高カロリーのもので肥満を招くよりも、バランス、栄養のとれたバランスのいい食事を進めていく。そういうような自給自足をもっていくと、そういうような食育を次の段階の文化として取り上げて、世界中にそうしたものを発信する。

我々被爆者は当然被爆の現実を世界中に発信する役目を持っておりますけれども、食料だって世界的な問題になると思います。そうしたことをあえて申し上げたいと思います。

○中村(攻) はい、ありがとうございました。年配の方からお話を聞いておりますので、ぜひ前半の部分でも若い人たちから、今自分たちは余り戦争のことを考えなくてもこうやって幸せに生きておれると、こういうふうにいる若者の幸せは、これを支えてきた人々のおかげなんだというお話がありました。本当に私たちは彼らが、若い人たちがしてくれるほど、本当にこの平和な社会を支える努力をしてきたのだろうか、この60年ですね。そのことも合わせて考えていきたいというふうに思います。若い人たちは、自分たちが今こうやって幸せに、戦争ということを経験しなくても生きておれるのはお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、戦後世代の大人たちのおかげですというふうに言っているんですけれども、本当に私たちのおかげなのか、私たちはそういう努力をしてきたのかということも合わせて、今の問題提起もあったかと思いますが、自分の問題としても考えなくちゃいけないというところに来ているというふうに思いますので、そういう点も踏まえてご発言いただけたらというふうに思います。

それでは、豊村さん、お願いします。

○豊村 次は平和についてということなのですが、なぜ戦争は起きるんでしょうか。世界各地には絶えず民族紛争とか国内の政治権力の争いなどが繰り返されて、そのたびに被害、犠牲になるのは武器を持たない市民です。軍事力では平和は達成できません。

私たちはやはり政治とは無関係に生きてはいけません。敗戦後、ドイツはナチスの犯罪を反省し、繰り返さないという過去の克服を積極的に戦後補償の政策に取り組んだので、周りの諸国から信頼を得てきました。信頼されてきました。日本は、都合の悪い過去は水に流すという態度をとってきたので、いつまでも信用されません。それは、日本社会に過去の15年戦争を正当化して、あの戦争は正しかったという歴史意識があります。この敗戦処理の中で過去に対する責任のあいまいさが、今日本のアジア外交の重荷になっています。今の時代、どの国も外国との関係を重く見て、1国、一つの国だけへの偏重ではなくて、とりわけアジアの一員として尊敬の念を持って親善交流することが平和と国益を増すと考えます。

それには、健全な自立した民衆、国民国家をつくるのが大事だと思います。国民国家というのは、税金を納めなさいと、そのかわり国は国民の生命、財産を守りますということです。でも、政府はときにうそをつき、ときにやさしさを見せます。いざとなれば平気で借金を生み出します。今も昔もです。

私なんかも経験したんですが、敗戦直後の預金封鎖と新円切替で新しいお札と古いお札の交換は1人100円に限られ、古いお札は半月で使えなくなりました。国民に煮え湯を飲ましたのです。今までいろいろと貯金したりためてきたお金が100円しか交換しませんよと、残ったお金はあと半月たったらもう一切お金の価値はありませんよということで、財産や何かは全部喪失させてしまったのです。それは、悪性インフレの、戦後すごいインフレが起きまして、悪性インフレの処置して国民の財産を踏みつぶしてしまったのです。

今この4年間で国の財政は太平洋戦争の規模に匹敵するほど世界一の借金国になり、綱渡り状態です。これには、国民への過酷な税金で返済しなければなりません。だけれども、自分の問題として考えたくないから目をそらすのです。大日本帝国が滅びたのは、無責任な政治体制ばかりではなく、黙って支配されることしか考えなかったすべての日本人にも原因はあります。本当ならメザシしか食べないのに、ピフテキやうなぎを食っている状態だと、今は、3度のご飯を2度にしてでも借金を返済していかなければならないと論評しています。多重債務者になっているわけですね、国が。

それで、21世紀の世界は次第に地球環境問題とか国境を超えた組織犯罪とかに対する国際刑事裁判所の効果とか非核の実現など、大国のエゴを抑制しながら、国際ルールの定着を求めてみんなが努力しています。

それで、戦後非軍事化と民主化を日本占領の大きな目標にしていたGHQによって平和

憲法がつくられましたが、憲法9条の改定が今論議されています。強い日本など見たくもない。欧州やアジアの不信感は強く、国内問題ではなく、国際問題になるのです。日本は忘れることによって過去が消えてしまうという歴史意識がありますが、ときはすべてを解決しません。

そして、終わりに、自分たちの安全や安心を求めるとともに、人に危害を加えない、加担しないために自分で考える、考えようとしなければ何も変わりません。そして、力の強い者たちのやり放題になってしまうのです。黙っていれば力の強い者たちのやり放題になってしまうということをやはり肝に銘じなければいけないと思います。

歴史は現在と明日を生きるもののためにこそあるのです。そして、平和のためにあるのです。

以上です。

○中村（攻） はい、ありがとうございました。やはり非常に厳しい戦争体験を豊村さんは、なされたわけで、その中から、なぜ自分はこうなったのかということをやはり考えてこられた。洞察も非常に深いものがあるというふうに考えました。

続きまして、それでは、長谷川さん、お願いします。

○長谷川 今、個人の気持ちの持ち方というのが最終的には非常に大事じゃないのというようなことを、いろいろな日本の置かれている状況下を踏まえておっしゃっていただけたのかなと思っています。

確かにそのとおりだと思います。ただ、ここまで仕組みないしは生きざまが、我々生きていくための生き方が政治、経済含めて、先ほどのセッションの方でもありましたように、戦争ってだれが起こしているのといったときに、心の奥底では我々も起こしているかもしれないし、その後側にいるもうかっている人たちはやめるわけにはいかないとかいろいろな要素が絡みあってきているんだろうとは思っています。

当然、先ほど言いましたように、政治、経済との関わり、それイコール個人との関わりです。例えば私は会社員代表ということでこの場所にいます。イコール会社自体は利益を生む集団、それに加担しているわけですね。たまたまうちの会社はどうやら軍事関係には手を出していないようですけれども、もしやっていたとすれば、それはそれでその会社にいる個人としては加担しているというのがわかっていながらもその中の経済に組み込まれてしまっているという何か非常に矛盾というか、「どうしたらいいの」の世界になってしまいますね。では、それはやめましょうとって私会社やめたら私自身が路頭に迷ってしまう。それでいくら平和だ平和だといっても本当に平和が来るのかなんていうようなことまで考えてしまうわけです。

でも、そう思ってもやはり平和ってイメージしなきゃ来ない。確かに理屈ではなかなか難しいけれども、それぞれみんながイメージしないことには全然来ないと思うんですよね。

そんな意味の歌がジョンレノンがイマジンという曲で9月11日のテロのときにもそれをアメリカの人たちはみんな歌っていましたが、改めて自分がイメージしなければ変わらないねと。当然イメージは悪い方にだってイメージすることはできます。そこがやはりみんな戦争の悲惨さだとかを語り継ぐことによってそれを起こさないようなことにするにはどうするのか、そういったイメージをしていかなければいけないのかなと思っています。

それから、もう一つ、戦争が始まるに当たって何でだろうねといういろいろ考えたときに、実はおととい友達と、日本の国を守るにはそれなりの軍事力が、守るといふか、専守防衛のためには軍事力が必要じゃないのかなというところでちょっと議論になりました。私自身は「何で？ いらんじゃん」というような立場に立っています。けれども、もう1人の方は、「わからない相手がいるんだから何が起きるかわからないんだから、最低限のものは持ってなきゃだめなんじゃないの」という議論になりました。

そこで私は「一体何を守るの？ 私を守るの？ 私の家を守るの？ 地域を守るの？ 会社を守るの？ 国を守るの？ 日本という民族を守るの？ 守るものって一体何？ 日本なの？ 人類なの？」というふうに、やはり一体どこで何かを差別化しようとするから、多分いさかいが起こる。その辺のところにもイメージしていかなければいけないのかなと思っています。

本来守るべきものは何と云ったら、地球だったりとか、もっと大きなものだったりするはず。それがたまたま隣近所とのいさかいを抑止するには軍事力が必要だとか、そういったふうに何か私違うなというふうに感じるんです。何が違うのかなというのが、何でそんなふうに敵をつくるのというようなイメージで、ちょっと違うなというふうに感じるんだけれども。

いずれにしろ平和な姿をイメージする。ないしはいろいろな人たちと仲良くできることをイメージする。では、そのためにどうすればいいのかというのが、走りながらなのかもしれないけれども、目標を持たないままで活動したときの怖さもまたあると思います。イメージを続けて私は生きていたいと思っています。

以上です。

○中村（攻） はい。大変難しい問題を自分なりに整理をしてお話をいただきました。ありがとうございました。

岩部さん、お願いいたします。

○岩部 先ほど言いましたけれども、私は戦争問題の原因の大きなところはやはり経済的な要因がかなり強いというふうに思っております。先ほど皆様がお話しされましたように、戦争の原因というのはいろいろあると思うんですけれども、例えば民族問題であるとか、民族紛争ですよね。そういった問題、それから宗教の問題。例えばイスラム教とキリスト教の対立だというようなことを言われますけれども、根をたどってみればやはり経済問題ではないかと思う。経済問題、貧困問題じゃないかと思う。イスラム教徒とキリスト教徒



が必ずしも仲が悪いか、そんなことはない。例えばアメリカとサウジアラビアの関係は緊密ですけれども、経済的な利害が一致しているとああいう形で、深いところではともかく表面上は仲良くしていられるという要素があるということです。

これはなかなか平和な世の中をつくるにはどうしたらよいかというタイトルなんですけれども、これは経済の現在の世界経済のあり方そのものというところに結局問題がいつてしまう、なかなか解決が難しい問題ではないかと思うんです。一昔前と言っては失礼かもしれませんが、前の大戦、それから大戦後のイデオロギーの対立、それから思想の対立、それからヒトラーのような独裁者の台頭というような問題がありましたけれども、これもやはりよく見るとそうしたものが出てくる背景というのは経済的な問題というのがベースにあるだろうというふうによく見てみるとそういったことを思うわけです。

ですけれども、最近では第2次世界大戦の余りにも大きな悲劇というか、結果を見て、少しずつ大規模な戦争というのは減ってきているような印象がある。例えばアメリカと日本が国同士がまともに戦車と飛行機を使ってまともに国を挙げて戦争をするといったことは少なくなっている。そのかわり何が出てきているかという、ピンポイント爆撃ですね。要するにどこかを攻めるときに余りたくさんの人を殺すと非人道的であるから、どこか軍事施設を攻撃するんだと行って空爆をします。その様子を証拠写真として映像に残してテレビに配信するというようなことまでやるわけです。

そういった形で戦争そのものが非常に巧妙になってきているということがあげられてくる。我々は、ここに集まっている皆さんもそうですし、ここに聞きに来てくださっている方もそうだと思うんですけれども、恐らくこれはやはり戦争になれば巻き込まれる側なんだろうというふうに思っています。ただ、我々もやはり知らない間に戦争に加担しているというようなことがあって、先ほど言った経済的な問題が出てくるわけですね。例えば日本の商社がどこかの国でレアメタルを掘り出したいと、コンピュータの部品に使うから掘り出したいと。ただ、そのレアメタルは内戦が起こっていて微妙な地域にあるといった場合に、その権益を確保するために政府軍とゲリラ側に両方お金を渡すというようなことはやはりあるわけですね。ゲリラ側は何をするかという、そのお金を使って戦争をやっているわけですね。そうした構造がある。

つまり、お金を持っている経済的な勝ち組の国、もっと言うと、国じゃなくてもしかしたら企業かもしれないし、国というものを超えた組織なのかもしれませんが。そうしたものの、勝っているものが弱いものを争わせて経済的な利益を持つというようなことに問題がある。

そうしたことに実際はもう経済活動として我々の国も間接的に手を下しているという可能性が高い。我々は鉄砲を持って戦争しているわけでもないですし、人を殺しているわけでもないんですけれども、回り回って我々のお金がそういったことに使われているという

可能性は高いわけですね。

ですから、そうした現実、今社会に起こっている現実、グローバル経済の中で弱者におかれて戦争の傘下に苦しんでいる人たちの現実、特に経済的な現実、利益を得ている人はだれか、どうして戦争が起こったか、そういうことを真実を見きわめていくような目をつくっていかないといけないんだろうと思います。

先ほどちょっと話が出ましたが、小泉政権、郵政問題で300議席をとった。郵政の問題では妥協できないということで反対を唱える人たちに刺客を放つというようなことをやったわけですが、なかなかこれは厳しい状況だなというふうに思うんですね。これは憲法の改正の問題でもそうですし、あるものごとを解決するために戦争という手段を選択するかどうかといったことを決めるときに、やはり反対意見が排除されやすくなる仕組みというのをつくられていっているということだと思います。

今回は選挙で「郵政」「郵政」という形で自民党300議席とりましたが、我々もその構造改革というところに期待して投票した方が非常に多いと思うんですが、その結果どういったことが起こるのかということはちょっと考えていかないといいなと思うんですね。

郵政改革以外にも自民党はいろいろなことを言っていると思います。これは皆さんどう思われるかわかりません。例えば自民党のマニフェストには防衛庁を防衛省に昇格するというのがさりげなく書いてあるわけですね。もちろん賛成される方もいるだろうと思いますが、非常に嫌悪感を持って見られる方もいるわけですね。そういったことをやりやすい環境になっていると。今回についてはそういうことじゃないかと思います。

我々は今後何をすべきかということなんですけれども、これは非常に難しいところです。特に経済のそういう、我々はある意味では経済的には勝ち組になっているわけで、そういった経済的な恩恵をどっぷりと受けているというような立場になります。戦争は遠い国の出来事という形になっていますけれども、その根っこは何か、戦争もそうですし、テロもそうですよね。どうしてテロが起きて、どうして戦争が起こっているのかというようなことをよく分析していくような能力を養っていかなくてはならないということですね。

それから、そういったこと、今こうやってフォーラム開いていますけれども、そうしたことを自由に発言できるというか、ものが言える社会というのを維持していかないといいなだろうということです。ものが言えなくなれば、結局はやりたい人がやるようになるという世の中になってくる。そうしたことを止めるような社会、これはやはりかなり成熟した社会だというふうに言うことができると思うんですね。言いたいことが言える、言いたいことを言うと回りから冷たい視線を浴びせられる、刺客を送られるというような世の中ではちょっとやはり困ってしまう。

だから、そういった成熟した社会をつくるために過去を学ぶということも重要でしょう

し、それからいろいろな各分野、例えば報道の分野であるとか、世界各国で仕事をしている企業の方たちがいろいろなことを見て、いろいろな情報を我々に提供できる社会。そうした情報を使って我々が自由にものを考えて言える社会ということ、そういう社会をつくっていく、維持していくということが重要なんじゃないかなという大変難しいテーマだと思いますけれども、私はそういうふうに考えています。

ですから、まずこの原因は何なのと、だれがやっているのということ、まずどうして、なぜということを考えていきたいというふうに私は思っていますし、またそういったことができる社会、教育、そういったシステムをつくっていただきたい、つくってほしいというふうに思っています。

○中村（攻） 大変貴重なご意見で、政治や経済のあり方というふうなもの深くかかわっているから、そのところを考えなくちゃいけないんじゃないかということ。そういうふう言われてみれば、今日憲法を取り巻く、非常に憲法を改正してもう一回戦争するというふうなそういうふうな状況というのは、日本の経済が国際化してきたという、再び経済力が非常に高くなって世界的に活動するというふうなことと本当は結びついているというふうなことを考えなければいけないのかもわからないなというふうな感じがいたしました。

それでは、大学生で大金さん、お願いします。

○大金 戦争をなくすためにということなんですけれども、まず、なぜ戦争が起こるのかということによく言われるのが、自分の国を守るためという話がよく出ると思うんですけれども。先ほどお話もあったように、私が思うに、自分の国を守るために例えば軍事力を持ったりとか核兵器をつくったりとかというのがあろうと思うんですけれども、でも、結局それって悪循環になってしまうと思うんですね。やはりどこかが持っていれば自分も持たなきゃいけないというふうにみんながそうやって思っていたら、結局ひよっとしたら世界中がそういうふうに軍事力を持つことになってしまうと思うので、自分の国を守るために軍事力を持つのではなくて、自分の国を守りたいんだったら、結局そういうことをやめることから始めないと戦争というのはなくならないんじゃないかなというふうに思いました。

やはり人が人を殺して何になるのかということも思いますし、戦争は必要のないものだと思いますので、まずはそういった軍事力をなくす方向に何とか向かっていけないかなと思います。戦争が起こる原因としていろいろ挙げられると思うんですけれども、でも、そういうのも結局戦争をしないと解決できないものでもないと思うんですね。やはりその軍事力を持つ持たないにしてもそうだと思うんですけれども、人の気持ち次第、持ち方次第で変わっていくものじゃないのかなと。何でも解決するには戦争、自分の国を守るためには軍事力というそういう即決した考え方ではなくて、もっと人と人のつながりを大事に、人の気持ち、自分の意思というのをもっと強く持つべきなのではないかなと。そういう兵器

とか軍事力におびえてばかりではなくて、と私は思います。

身近な問題として、最近、さっきもどんどん話題が出ていましたけれども、9月11日に選挙がありまして、実は私にとっては初めての選挙だったんですけれども、今年で21になるんですが、実は初めての選挙に先日行ってきました。やはり私ぐらいの若い世代の人がよく言うのは、政治に関心がない人がすごく多いと思うんですね。政治に自分が関心がないのをすべて政府が自分たちが関心を持てる政治を行っていないからだということを理由にして、例えばそれで政治に興味がないから選挙に行かないとかという人が実際私の回りにも結構いるんですけれども。そういうことでは結局いつまでたっても何も変わらないと思うんですね。政治に関心を持ちたいんだったら、やはり自分から動かないといけないと思うし、そうやって政府のせいにしていくようではいつまでたっても関心を持ってないままだと。結局、それも言いわけでしかないんじゃないかなというふうにも思います。さっきも言ったように、こういう気持ちを変えていくことが今後どんどん必要になっていくのではないかなと思います。

最後に、私の最近の印象なんですけれども、戦争を行う理由として、経済的な問題が取り上げられることはあると思うんですけれども、私もちょうど高校生のときに習ったんですけれども、戦争というのはすごくもうかるものだというふうに教えてくれた先生がいて、戦争を肯定している人たちというのは結局そういう利益のことしか考えてなくて、自分たちの利益、そういうのを市場原理主義といったと思うんですけれども、自分だけが幸せになればいいという考え方だと思うんですね。ほかの人が幸せじゃなくても自分が幸せになればいいやという人が、戦争のことはとりあえず置いておいて、テレビとか見ても経済的なことに関してそういう人が多いんじゃないかなと思います。そういう市場原理主義の人が大抵戦争を肯定しているんじゃないかなというのが、最近ニュースを見ていた私の印象です。

日本独自の考え方でみんなが平等に幸せになればいいじゃないといういわゆるちょっとあいまいな考え方だと思うんですけれども、そういうのが最近すごい古くさい考え方だとか言われるようになってきているんですけれども。確かに悪い面もあると思うんですけれども、そんなに否定されなきゃいけないことなのかなというふうにも思います。やはりそうやってみんなが幸せ、平等に幸せになれるというふうに思っていれば絶対に戦争というそういう選択肢すら出て来ないものだと思います。

選挙といたら、私は今回の選挙で一番注目していたのは、やはり憲法9条の問題を一番に考えたかったのに、ふとテレビを見たりとか新聞を気にして見ると、やはり郵政民営化のことが一番取りざたされていたのがちょっと残念で。私の意識の中ではその憲法の問題が一番に考えられるべきなのではないかなと思っていたんですけれども、意外と陰に追いやられていたような感じがします。今回の選挙というのがすごくワイドショー的という

か、小泉劇場という言葉もありましたけれども、若い人たちに関心を持ってもらうためにはすごくいい意味をもたらしたのではないかなと思うんですけれども、何かやはりどうしてもおもしろ半分で選挙を考えさせてしまったのではないかなと思います。それでもやっとな投票率は半分を超えた程度だったので、こんなのではよくないんじゃないかなと、私の世代、二十歳前後の世代を代表させて言わせてもらうとそういうふうに思いました。

やはり何か変えなきゃいけないんだけど、何をしたいかわからないというのが本音だと思うんですけれども。でもそのままなあなあで過ごしていたら結局どんどん上というか、権力を割と持っている人たちにいいようにされてしまうという話もありましたけれども。本当に全くそのとおりだと思うので。一番言いたいのは、自分の気持ちというか、意思をきちんと持つ。戦争をなくすためにはそういう気持ち次第なのではないかなときょう今までを通じて私は思いました。

以上です。

○中村 (攻) はい、ありがとうございました。

そうしたら、次は高校生のところにいきまして、野澤さん。

○野澤 きょういろいろな方のお話を聞かせていただいて、平和な社会を築くためにはということを考えると、やはり今まで、今私は平和な社会の中で生きていて、平和だということがよくわからないくらい本当に平和で幸せだと思いますけれども。今、幸せなのは第2次世界大戦が終わってからの日本の平和な社会を築いてきてくれた方々のおかげだと思うので、これから私たちがしなくちゃいけないことは、それをいかに持続させていくかだと思うのです。戦争を忘れることは絶対にしてはいけないし、平和を続けさせるためには戦争を反省し、次の世代に伝えていくことが一番大事だと思います。

戦争の原因は民族の問題や宗教の問題など昔からの問題で、今すぐ話し合いでどうかなる問題じゃないこともあると思いますが、そこで人間同士が殺し合うことの悲惨さをもう一度考え直して、それで戦争が起こってはいけないということをもう一回理解しなくちゃいけないと思います。

そして、日本は第2次世界大戦で大きな戦争を起こして、多くの犠牲者を出した国なので、これからはその戦争の事実をもっと広めていかななくてはいけないと思います。広めていくことで戦争が少しでも少なくなるように努力していかななくちゃいけないことだと思います。

今資本主義社会で利益を求めあまりに、ほかの国を犠牲にして自分たちの利益を求めあまりに戦争になったり、そういうことが起こっていると思うんですが。もう一回、人は国とか地域とかで差別するのではなくて、地球に住んでいる地球人として共存していくことを考えれば戦争は少なくなっていくと思います。そのためにも憲法9条は絶対になくなってはいけないし、戦争を忘れてはいけない。戦争、どんどん時がたつにつれて戦争を

忘れやすくなってくるのは当たり前のことなので、それが当たり前じゃなくなるように戦争を伝えていかななくてはいけないんだと思いました。

○中村（攻） ありがとうございます。

それでは、次、お願いします。

○中村（晴） きょう戦争の話をいろいろな方々に聞いてより一層思ったのが、やはり若い世代が戦争を知るべきだなと思いました。若い人の戦争に対する意識とか知識というのは同年代の友達とかに聞けば、戦争をどう思うと聞いたら、悪いと思うとかいけないと思うとかいう程度で、どうするべきだというのはやはり言わないというか考えられないのか思わないのか、言わないんですね。だから、やはりそういうのは実際に体験したことがないから言えないのかなというのものもあるのかもしれないけれども。戦争を知る場というのは、私たちが戦争を知ることができる唯一の場所というかそういうのは、やはり体験したことのある人の話を聞く、学校であるとかテレビであるとかそういう場でしかないんですね。体験した人の話を聞くのは本当に機会がほとんどなくて、テレビというのも戦後大体8月の夏休み中に、6日とか9日とか15日とかそれぐらいのときにテレビであるぐらいで、学校でも歴史では習いますが、授業では学ぶんですけども、覚えるというだけであって、理解をしてはいないと思うんですね。テストに出るからここ覚えたとかその程度であって、戦争で実際に何年であってどういうことが起こったというだけじゃなく、その内容で、日本がどういうことを外国にしたのかとかそういうふうなちゃんとした内容も知っていくべきだなと思いました。

それから、戦争に対する若い世代の意識が希薄になっているんじゃないかなと。やはり実際に経験していないからとかそういうことで現実感がない、実際の世界とは違う感じにいるみたいな感じで。

それから、平和学習についてもっと内容を濃く、若い世代の人にも現実にあった、こういうことがあったんだよというのを代々教えていかないとこれから先、憲法第9条である戦争をしてはいけないということに対しての考えが薄くなっていくんじゃないかなと思います。

それが大体私の意見です。

○中村（攻） 大変すばらしい意見をいろいろ聞かせていただいております。

では、中学生で、今井さん、お願いします。

○今井 私は同じ年代の人たちが体験できないようなことを今年になっていろいろ体験させていただいています。広島を訪れていろいろな人の話を聞いてくることも、今回のようなリレートークに参加してさまざまな年代の人の意見を聞くこともなかなか中学生では体験できないことだと思うので、すごくいい体験をできていると思います。なので、この体験を通して、周りにどう伝えられるか、どう伝えていかなきゃいけないかというのが自分

にとって課題になっていると思います。周りが全然戦争について知らない中、自分がたくさん勉強できている。もっとこの先、戦争を体験している方たちがどんどん減っていくので、私たちみたいなしっかりいろいろな所で体験できている世代が先につなげていかなければ、また同じような過ちを繰り返してしまうのではないかと思います。

私が平和な世界を築くために必要だと思うことは、緑を増やすことです。戦争があつて自然がどんどん減っちゃっていて、でも復興して自然とかも増えてきているのに、でも都会化が進んじゃって、また自然がどんどん減っちゃっていて、大切な資源とかも少なくなっちゃっていると思います。自然の豊かさは心の豊かさ、緑が少ないから視野が狭くなって心の広さも狭くなってしまっているのではないのでしょうか。そのため、友達同士の口げんかから殺人につながっちゃったり、ほかにも自然がないことで心がどんどん汚染されていっちゃっているのではないかと思います。

なので、私は戦争のない平和な世界を築くために、もっといろいろな都市に緑を増やしていくべきだと思います。

○中村（攻） それでは、最後になりましたけれども、横山君。

○横山 きょういろいろな方々からお話を聞いて、やはり戦争と平和について語り合っていくことが平和な世界を築くためにつながっていくのだと思います。

それと、言い方は悪いのですが、原爆という恐ろしい核兵器をつくったのは人間です。その人間が核兵器をつくれたということは、その核兵器をなくし、平和をつくっていけるということも人間ができるということです。

自分たちのような、実際に原爆を受けた被爆者の方々からのお話を聞いた人がやはり今の世代、これからの世代へと伝えていかなければ、戦争のことというのがわからなくなってしまうと思います。

具体的な例として、小学校や中学校、高校などの修学旅行で実際に広島に行ってもらい、資料館の見学、それとあと灯籠流しなど、平和についてちゃんとわかるようなことを体験してもらえれば戦争のことを真剣に考えてもらえると思います。

今の戦争を知らない世代が少しでも戦争のことを伝えていけないと、これから将来戦争のことを全く知らない世代だけがいることになってしまいます。でも、こちら側がそうやって仕向けても、自分たちが平和について考えようとしなければ意味がないと思います。そして、これからは人間が人間を殺し合う戦争は二度と起こしてはならないということを実際に一人ひとりが真面目に考えていかなければ平和な世界は築けないと思いました。

○中村（攻） 最後にこうした語りが大切なんだという形で横山君が締めくくってくれましたけれども。皆さん、いかがだったでしょうか。戦争はなぜ起こるのかということと、それからどうしたらなくしていくことができるのかということについて、平和を守っていくことができるのかということについて、きょうはそれぞれの年代は違いますので、社会

体験は違いますけれども、それぞれユニークな考えを聞くことができたというふうに思います。

私も簡単に感想を述べさせていただきますと、やはり戦争を起こさせない、平和を守っていくためには、まず何よりも大切なのは戦争の体験を伝えていくということだと思います。平和を守っていく運動の原点はやはり戦争の悲惨な体験をしっかりと受け継いでいくという、そのことがやはり原点だと思うんです。その点でわずか60年前に起こったことなのにそういう現実が知らされていないという若い人たちのきょうのお話を私たちは真剣に受けとめなければいけないというふうに思います。

若い人たちに戦争の現実というものをしっかりと受け継いでいく、そしてそのことがやはり平和な社会を持続し、継続させていくその基礎になるんだというふうな意味合いでも、例えば教科書問題だとかという形で、子どもたちにそういうことを教えない方がいいんじゃないかと。戦争の現実ばかりというふうな、今ですら十分でないのに、教えない方がいいような社会の動きをつくってきているというのは、私は若い人たちが、私たちのおかげで若い人たちは平和だというふうに言われましたけれども、そうではないと思っています。私たちの世代は前の世代の犠牲の上に平和をむさぼってきた。だけれども、次の世代に平和をつないでいく努力をちゃんとしていないという、今それをやはり私たちはちゃんと引き継いでいくというふうなことが大人たちに課せられている義務だというふうに思います。戦争をしっかりと伝えていくということがやはり平和を守っていく原点だというふうに思います。

それから、二つ目には、国際間の争いというふうなものがいつの時代も生まれてくると思います。いろいろな国があるわけですから。国際間の意見の違いからいろいろな争いごとが起こってきます。でも、そのときに私たちは日本国憲法、平和憲法を持っています。憲法にはどういうことが書いてあるか。そういう国際紛争を武力でもって解決しないということが書いてある本当にすばらしい憲法なのです。いろいろな国の間でいろいろな問題も起こったときに、武力で解決するという方法はもう日本はとらないという、話し合いで平和的にその問題を克服していく、人間にはそれだけの叡知がもう蓄積されてきているはずだというふうなものがきちんと書かれています。

だから、私たちは国の間でいろいろな問題の違いが起こってくることを何も恐れる必要はありません。しかし、そのときに今の社会を謳歌している、世界を謳歌しているような武力でもってそれを解決していくというふうなのではなしに、やはり話し合いで平和的な手段で国際間の問題を解決していくというそういう平和憲法を私たちは今本当に高らかにあげて、これを世界に広めていくという役割があるのではないのでしょうか。それが世界の人たちを、あの戦争で2,000万人の命を奪い、国民も300万人以上が犠牲になった、経験したことがない未曾有の戦争をやった国民として世界の人たちに、とりわけアジアの人たち



にやはり私たちが果たしていかなければいけない役割というふうに思います。この点でも本当に私たちは考えなくちゃいけないと思います。

今、憲法を変えるという勢力が国会でももう9割を超えてしまったのではないですか、今度の選挙です。もうそうですよね、今の政権の人たちは当然何だかんだ、幾つかの若干の違いはあってもそういう方向ですし、民主党の党首選挙でも党首になられた方も、また政策の責任者になられた方も国防族です。憲法は早いうちに変えた方がいいという方たちです。もう国会では9割がそういうふうになってきてしまっているというのは、私たちがそういう状況をつくり出してきてしまっているというふうなことについてやはり考えなければいけない。立場や思想や信条、宗教の違いを超えて、憲法は守る、これは尊い命の犠牲の上に築かれたものなのだと。これしかないという。軍事力で抑止すると、敵が攻めてきたときに軍事力で防止するというふうな考え方を全面に立てるならば、際限のない軍拡競争になっていくと思います。こちらがこれだけ軍事力をつければ、それに相手は勝らなくちゃいけないからもっとうなる。そうしたら、こっちはもっとうなるという、際限のない、軍事力による抑止力というような軍拡に向かっていく。私たちははっきりと軍縮の方向で、軍備を縮小していく方向で世界をリードする、そういう役割があるのだという。そして、武力に頼らなくても国際的な問題は解決できるというふうなことがらができるんじゃないでしょうか。そういうふうに二つ目には思います。その意味で平和憲法をしっかり守っていかなくちゃいけない。

それから、三つ目は、戦争で金もうけをしないということだと思います。これはもうずっとやはり戦争の一つの歴史を引きずってきたものです。私たちの今日のこの繁栄というふうなもの、朝鮮戦争のおかげだというふうに言われるくらい、戦争というふうなものは非常に金もうけの手段になるというふうなことは事実だと思いますし、また、そのために戦争が起こっているというふうに言ってもいいのです。私たちはそういうことは慎む。国家とか企業とか組織とか、いろいろなそういうふうなものはありますけれども、人の命を犠牲にして守らなければならない国家もない。また、そういう組織もない。人間の命を守っていくという共通の基盤の上に国家や会社や企業があるというそういう最低限のモラルというふうなものはやはりつくっていく。その先頭に私たちは立たなければいけないのではないかというふうに思います。

それから、もう一つは、やはり幾つか出たものの中に、今日本は非常に危険な状態だというふうに確かに思います。1人当たり600万円の借金を抱えている国です。家族4人で2,400万です。それほどの借金を抱えていますから、これからあちこちでやはり福祉や医療やいろいろなところで国民の不満がたまってくるというふうに思います。そういうときに、国民の不満がたまってくるときに、一つの大きな政治家がやる方向は、それを外国に向けて行って戦争という形で国民の不満を吐き出していくという。そういう状況に私たちはあ

る部分いるという。この借金とこういうふうな問題を一体どう解決をするんだという。そういうふうな社会の状況も踏まえながら、私たちはもう少ししっかり賢くものを見ていかなければいけないときにきているというふうに思います。そして、そうやって生きていくことがやはり若い世代のこういう彼らの決意を本当にまっとうなものとして育て、そして彼らをして次の世代にしっかりとバトンタッチしていくというふうなことになるのではないかとこのように思います。

最後になりますけれども、そういう意味で真実を見抜くということが非常に大事になってきているときに、マスコミだとかそういうふうなものが本当に真実を伝え、見抜く状況になっているのかというふうなことがらについても気を配らなくてはなりません。NHKの戦争のそういう報道一つ見てもチェックして、そして権力と癒着してしまって、そして放送番組の中身を変えていくというそんなふうなことがらを私たちは何も知らない大人では子どもたちに申しわけがないというふうに思います。真実は真実として国民に伝わっていくようなそういうマスメディアを中心とした社会環境というふうなものも私たちはしっかり目を向けていかなければいけない時期にきているというふうに思います。

一応時間がきましたので、これできょうの討論会をおしまいにしたいというふうに思います。

きょうは本当にパネラーにも恵まれたと思いますよね、皆さん。拍手をお願いします。

(拍手) 本当に世代を超えたすばらしいパネラーにも恵まれました。たった一つ残念だったのは、参加者がもうちょっと多かったら、この話をぜひ我孫子の市民の多くの人たちにもっと聞いてほしかったというふうに思います。皆さんの力でぜひこういうことあったよというふうにして広げていただいて、この会を企画された方々には、この参加者の少なさに懲りることなく、さらに参加者を募って力強い運動を展開していただくことをお願いして、きょうの会を終わりにしたいと思います。

どうも。(拍手)

○司会 中村先生も長い時間にわたり、本当にお疲れさまでした。皆さん、中村先生に、どうぞ拍手で。お疲れさまでした。(拍手)

それと、清水様、豊村様はじめ、皆様本当に長い時間でしたけれども、本当に貴重な意見を私たちはお話を伺うことができたなというふうに思います。皆さん、どうぞ9人の方々にもう一度盛大な拍手をぜひお送りください。お疲れさまでした。(拍手)

どうもありがとうございました。

私たち運営委員会でこうした各世代の方たちが集まって話をする機会を本当に期待してつくってまいりましたが、こんなふうにしてバリアフリーで自分の意見をきちんと言って、そしてまた清水様や豊村様のようにお話をじっくり聞く機会をつくることができ本当によかったなというふうに思います。皆さんもそうではないかなというふうに思っております。

#### 第4部 中学生の発表やリレートークの記録、講演録

すが、いかがでしたでしょうか。

本当に地域の中で子どもたち、きょう広島に行った子どもたちの力は素晴らしいということもまた感じました。どうぞバリアフリーで平和って何だろう、そして今あることは何だろう。知ること、それから話し合う場ということを、きょう本当に来ていただいた方が地域に戻られて、ぜひいろいろなところで発信していただきたいというふうに思います。

きょうは長い間本当にありがとうございました。(拍手)

文責 我孫子市企画調整担当